

ます。このやうに各地方で一つの變つた相があつてほしい氣がします。何でも東京のはやりを逐うてをるのはあまりに單調な氣がします。兵隊や學校の生徒のやうに、ああやつて一しよに働かねばならぬところにあつては、一樣の服裝をするのもやむを得ないことであらうが、一人づつが働いてをるところにあつては、一人一人が違つた服裝をしたのもよいやうな氣がする。何が流行するからといふのではなしに、その人独自の好みの服裝をするやうになつたら面白からうと思ひます。田舎へ行つて東京風をした人にあふよりも、田舎丸出しの風をした人にあうた方がなつかしい氣がします。田舎者が東京の眞似をしたり大阪の眞似をするのは見よいものでありませぬ。やはり、地方の風習は、その地方に相應して發達したものであらうから、無暗にそれを棄てて

都會化するのも考へものだと思ひます。

小學校教育について私は思ひます、今日ではあまりに劃一的になりすぎてゐないでありませうか。東京に住んでをる文部省のお雇の學者たちの頭で考へた教育が日本の津々浦々にまで強制されてをる。今日では、地方の美しい風習が何の値打もなく逐ひ拂はれてをるやうな氣がします。歌でも舞踏でもその地方地方でなかなかよいものがあります。ところが、そんなものがちつとも顧みられないで、西洋の焼き直しの唱歌やダンスで劃一しようとしてをるのはあまりに淺慮なことではあるまいか。遊戯だつて運動だつて、西洋輸入の野球やテニスや競争などで劃一しないでも、相撲や番持や竹馬や紙鳶上げや獨樂廻しな

どの遊戯があつてよいやうな氣がします。新しいものを迎へる心も面白いが、古いものや地方的のものを顧みずに棄てるのも惜しい氣がします。小學校教育にも地方的な色彩を充分に帶ばしむるやうなわけにすることが出来ぬものであらうかと思ひます。女學校の料理法などを見ると東京の料理ばかりを日本中に教へてをるやうな氣がします。これらも、もつと地方的にならねばなるまいと思ひます。大體、今日の學校教育は、萬止むを得ない事情があるかも知れないが、あまりに劃一的に人を教育する弊があると思ひます。一山三文に投げ賣するやうな人間を拵へないで、もつと異彩を放つ人間を育てるやうにしたらどうかと思ひます。今日では、人間として美しい發達を遂げしむるといふ教育ではなくて、或仕事に間に合ふやうな人間を劃一的に造り出す

といふ教育が盛んになりすぎてをるやうな氣がします。この教育上の弊害を救ふためには、舊來の私塾のやうなものもどしどし出來て來ななくてはなるまいと思ふ。今日の學者たちが、大學の教授の椅子を離れて單獨に自己の講義をして、そこに集まれる學生を自由に聽講せしむるといふやうに變つて行つたらどうかと考へます。

こんな風に、各方面のことを考へて來ると、社會にしつかりした組織が出來、秩序が出來て來るといふことも單調な窮屈なやうな氣がします。だからというて、無秩序混亂の状態も困るのであります。あまりに平等になりすぎた世界も面白くない、又あまりに階級的に固定しすぎた世界も面白くない。そこの程合が餘程むづかしいものだと思

ひます。

或人が細君を連れて世界を漫遊して來ました。私は、その人にあな
たは到るところ自分の家庭を持つてあるいて來たのだから、ほんたう
に變つた世界を見ることが出来なかつたであらうといひました。私は、
旅行するに一人旅が好きであります。近來眼が悪いので一人だと相當
に不自由をしますが、それでも一人がよいやうな氣がします。連れと
一しよに旅をすると、どこに行つてもその連れと話をしてゐて、充分
に變化を味ふことが出来ないやうな氣がします。到るところに新しい
友を見出して、その境地にひとりつつ變化を経めぐる方が私のやうな
旅行好きなものにとつては最も興味が深いのであります。かうした自

分を内省するときに、心からジフシー的な男だなと自分を思ふことが
あります。かうした性質をもつてを私は、物事が固定的に劃一されて
行くのをいやに思ひます。平等といふよりもむしろ差別、常住といふ
よりもむしろ變化、一樣といふよりもむしろ多様といふやうな世界が
面白いやうな氣がします。單調な平和が續くよりも、時に、變化ある争
鬪の起るのも面白いと思ひます。澄みわたつたみ空の月も美しいが、
一天俄にかき曇つて雷雨の起るのも面白い。道を歩いても平地ばかり
でなしに、山があつたり川があつたりした方が興味があるやうな氣が
します。仕事をしてても骨のをれないことばかりでも厭きが來る、とき
には汗をしばるやうな目にあはなければ働き甲斐がないやうな氣がす
る。分りきつた本を読むよりも、ちと首をひねるやうなむづかしい本

を読む方が面白い。食物でも甘味・酸味・辛味いろいろあるところかうまいやうな気がします。

かうした性情をもつた私は、今日の社會傾向があまりに劃一的になつて行くのを見て、一種の寂寥を感じてをるのであります。それと同時に、社會をかやうに劃一的に考へて行くよりも、もつと差別的に發展して行くやうに考へて行く人もあつてほしいやうな気がします。單調な方面に歩む努力よりも、もつと異彩のある人生の方に歩む向けるやうに考へて行く人も有つてほしいやうな気がしてをります。

(大正一四・一一・二五)

二四。超國家的思想の方へ

一。

私が私を考へるときに、そこに二つの私を見出します。その一つは五尺の肉體に限られたる私であります、他の一つは五尺の肉體に限れない私であります。私が日常の云爲行動を反省してみると、或時は第一の私に重きをおくことがあります、また、或時には第二の私に重きをおくことがあります。話をすすむる便宜のために私は第一の私を自己と呼びます、さうして、第二の私を超自己と呼びます。この超自己といふうちに、親子・兄弟・社會・國家等のすべての所謂周圍な

るものが含まれてをるのであります。深く私を内省して行くときには、私は單なる肉體に限られたる自己ではなくて、肉體以外のすべてが私であることが分つてまゐります。かうなると、私が唯一の實在であつて、私と世界が一つになるのであります。かうした私には、先きに所謂自己と超自己との二つが含まれてをることになります。さて、かう定めておいて、私の日常生活を検査してみると、この自己に走つて超自己を省みない場合があります。また、超自己に走つて自己を省みない場合があります。これを異つた人格の上に検査してみますと、或人の生活は自己に限定されてをるものがあります。また、或人の生活には自己がなく超自己のみが働いてをるものがあります。また、或人には或は七分三分・或は四分六分・或は五分五分等の雑多の分量によつて混

雑してをるものもあります。それらの上を考に入れて私の考をすすめて行かうと思ひます。

人が人として生存して行くについて、どうした意識をもつて生きて行くのであらうかといふことを記述科學的に調べてみます。すると、私たち生物には常に自己と超自己との二つの上に心が動いてゐなければならぬといふことが分つてまゐります。自己を保存して行くについて、自己のみを思うてゐてはいけぬ、やはり超自己の考がなくはならないといふことが分つてまゐります。この自己といふ念を個人性と名づけるならば、この超自己を社會性と名づけてもよいと思ひます。個人としての生存を保つには是非とも社會的な意識を必要とします。社會的意識のない個人は、個人としての生存をも危くするもので

あると考へられます。尤も、社會性のみにて個人性のないといふことも個人の生存には危殆を與へるものであります。ですから、個人を徹底的に考へれば、社會に行き、社會を徹底的に考へれば個人に行かねばなりません。かうなると、個人がそのまま社會といふことになりません、ここまで來ると、また、私の内にある個人と社會といふことになつてまゐります。

生物界の現象を見ますと、個體と個體との間には、常に生存競争が行はれてをります。だから、生物としての個體は生物それ自身の本能で他を排しても自ら生きんとする欲求と努力とをもつてをります。これと同時に、争の敵としたものをも自分の内に入れて考慮せねばならぬやうになつてをります。すべてを敵として戦ふものは自ら亡びな

ればなりません。だから、生存競争裡に立つてをる個體は、また一面相互扶助の精神に動いてをるのであります。で、この生存競争の念と相互扶助の念とは、織りなされて生物の生活を形造つてをるのであります。ダルキンはその競争の一面を捉へて弱肉強食論を唱へ、クロポトキンはその相互扶助の方面を捉へて生物相愛の道を唱へたものだと思います。生存競争は所謂個人的自己の生存欲であります。相互扶助は社會的即ち超個人的自己の生活であります。どんな個體でもこの二つの意識をもつてをらぬものはないのであります。その何れを缺いても生存が危くなるやうに思はれます。生物自然の狀態がこの二つを具有してをることから、生物の生存にはこの二面を具有しなければならぬといふ規範的の考も生れてまゐります。個體が個體として完全

な生存を保つには純粹に個體自身の存在を欲求する強い意志を有すると同時に、一面にはこの個體を超えた超自己の意識をも所有しなくてはならぬと思ひます。個體が個體の中に超個體の意識分子を多く含むものほど廣さにおいて長さにおいて大きな個體を有することになると思ひます。かくして、その頂上に達したときには、個人我と社會我とが一つになつて、全世界としての私が味はれるやうになるのであります。

二。

個人の上のかうした考から、私は、今、國家といふ一つの法人を個人として考へた上に、國家的意識と超國家的意識とが國家の存立上共

に缺くべからざるものであるといふことを考へるのであります。國家が、他の多くの國家の間に立つて存在するには、個體が他の個體の間に存在するやうに、國家的生存競争の念は離れることは出来ないものであります。しかし、この念ばかりでは國家の存立は安泰になることが出来ないであります。國家といふ一公法的個體は他の個體をも自分の内に入れて考へるやうな超個體的な意識をもつてゐなければならぬと思ひます。國家が敵國を有すると同時に、その敵國との相互扶助の念を忘るるわけにはゆかないと思ひます。このことは、どんな戦争の場合にも、戦争の宣言のうちには陰に平和を豫想してをるといふ事實によつても證明せられることと思ひます。戦争は國家的生存競争であります、平和は國家的相互扶助であります。相互扶助の精神即ち平

和の觀念のないところには戦争は起らないのであります。また、戦争があつて平和を豫想しないことはないやうであります。この事實によつて考へると、國家といふ合法的個體においても、常に生存競争と相互扶助との二つの意識が織りなされてをることが分ります。さうして、その國家が、國家的意識の内に個的國家のみを有して、超國家的意識を有しないときには、さうした國家は自滅を急ぐより外はあるまいと思ひます。國家が公法的個體として存在するには、是非ともその意識の内に超國家的のものがなくてはならぬのであります。この超國家的意識の盛なる國家はその大を加へその壽を加へ行くと思ひます。同じ戦争でも、この相互扶助の欲望の不満から起るものは、國家の隆盛を加へて行きます。これに反して、超國家的意識なくして單なる個體生

存の欲求によつてのみ戦ふ國家は自らその壽を短くするのであります。それで、國家といふ一つの公法人は、自己の生存を大にし且永遠にするために、常に超國家的な意識をもたなければならぬことになつてまゐります。

三。

國家を一公人として考へ、その意識を考へて來たところの思想を具體的な方面に當てはめて考へてみたいと思ひます。國家が有する個的國家の生存欲を主義とする思想を國家主義と名づけます。これに對して、個的國家を超えた思想を超國家主義或はまた國際主義と呼びます。さうして、それを國家に生存する國民の上に當てはめて見るのです。

國家主義を抱いてをる國民がをります、また超國家主義を抱いてをる國際的な人間もをります。一見したところでは、國家主義者のみが國家の干城であつて、超國家主義者は國家の生存を殆うするものであるかの如く思はるる場合があります。國家主義者は超國家的思想を國家に對する危険思想と思ふ場合があります。かうした考が果して正當であらうかどうかといふことが私の今考へようとする問題であります。尤も、超國家主義者の中には國家主義者に反對して國家の個的存在を否定するところの非國家主義者もをります。非國家主義者が國際主義を唱道する場合があります。根柢的に個的國家の存在を否定する思想家があります。彼等は常に社會を呼び人類を呼んでをります。彼等自身は國民としての存在を願はずして、社會人として、或はまた單なる

人間としての存在を願うてをるのであります。従つて、彼等には個的國家に對する愛の念がないのであります。むしろ、嫌惡の念をもつてをるのであります。かうした人間が國家の土地の上に住んでをるのは、個的國家に對する危険なことであるかどうか。國家主義者から考へれば、危険であるに違ひはない、しかしながら、國家主義者を所有としてをる國家としては、自己の内にこの非國家主義者の存在することも自己の存在における必要なことではないであらうか。かうした人類的な國際的な人間が國家の内をすることは、國家自身に危殆を及ぼすといふよりも、むしろ、國家にその大を加へその壽を加へることになりはしないであらうかと私は考へてをります。それでは、國家の要素であるところの國民全體が、この非國家主義者になつたら國家はどうなる

であらうと考へてみると、さうした場合には、勿論國家は滅亡します、しかし、國家の成立した精神としての國家は、それらの非國家主義者の社會的團體によつて一層大きな強い新しい國家を成立せしめることになりはしないだらうか。舊態の國家が滅亡して新裝の國家が生れることになりはしないだらうか。そしてみると、國民全體が非國家主義者になるといふことが新しい意味における國家の現出になります。

もし、國家の内に國家主義者と非國家主義者とあるならば、その二つを包有する國家は他の國家の間に伍してより、確かなる存在を保持することが出来ると思ひます。單なる自己の國家のみを愛して他の國家を愛しない、むしろ、他の國家を常に敵として考へてをる國家主義者が多くなることは、却つて國家の存在を殆うする場合があると思ひま

す。これに反して、一見國家を害するかの如く見ゆるところの非國家主義または超國家主義者が内に存在することが國家の大を加へ壽を加へる所以ではあるまいか。この意味において、私は、國家の意識の内にも、もつと具體的にいふならば、國民の間に、超國家的なまた非國家的な人間のをることは國家として憂ふべきことではなくて、むしろ、喜ぶべきことではあるまいかと考へてをります。

四。

今から十年あまり前に外務省の通商局長をしてゐた坂田重次郎君が話してゐたことがあります。本願寺がアメリカに布教をしてをる、その布教師がアメリカ内地へ入り込んで日本の教育勅語の講義などを

やつて、小さな國家主義を鼓吹してくれるのが、却つて日本の國際的地位を險惡にする處がある、宗教は國境を越えたものであると思ひます、超國家的なものだと思ひます、宗教家はその超國家的な思想を宣傳してくれたらば、却つてそれが國家の利益になるのであります。だから、本願寺の布教師などが小さな國家主義を宣傳せずして人類的な佛の心を宣傳して下さつた方が、私たちのやうな外交官にとつては結構なのであります、小さな忠義立てが却つて國家に害を興へるやうであります、こんなことを表向きに言うたら、頑冥な政治家たちから外務省は非國家的だなどといはれると困りますからあなたたちにまで内意をお話しておきますから、内側から改めていただくわけにゆかないものであらうかと、坂田君が申してをりました。坂田君はその後西班牙

牙の公使となつてをるうちに、かの地でなくなりました。私が坂田君を思ふときに、いつもこの話を思ひ出します。そして、國家の内には超國家的な思想家が是非ともおなくてはならないものだといふことを感ぜしめられるのであります。

この頃、支那から歸つた或人の話に、大谷光瑞氏が久しく上海にをらるるが、支那人の間にはいたつて不評判であつて何等の宗教的感化を興へておない、それは何故かといふに、光瑞氏は國家主義者で個人的な日本主義者であるために、一般支那人は彼を目して國事探偵のやうに思つてをります。従つて何等の感化を興へることが出来ないのです、氏がかうした態度になつてをるよりも、むしろ、國境を超えた阿彌陀佛の慈悲の宣傳者であつて、眼中日本なく眼中支那なく印度

なく英國のないやうな人であつた方が日本としてもどんなに氏によつて利益を受けることも知れない惜いことであると言つてをりました。私も、同じやうな感じをもつてをります。

國家機關における外務省などは個的國家に思想の根柢をおく人よりも、超國家的な、むしろ、國際的な思想を有する人によつて、最も適切な運用を見ることがたと私は思ひます。外務省の人たちは、常に頑冥な國粹論者から非國家的だと抗爭せられるやうな人でなければならぬと考へてをります。

五。

赤十字の事業があります、これは、國家がやつてをる仕事であつて、

しかも、これが超國家的な傾向をもつてをるのであります。國家が戰爭状態にある場合に、その敵と味方の兩方の傷病兵を救済するのが赤十字社の眼目とするところである。その運用において、この目的が正當に果されてをるかどうかは疑問であるが、ねらひだけはたしかに超國家的思想に基づいてをると思ひます。

また世界戰爭中に畫策せられたる國際聯盟などいふことも、その唱導する人の心の内に、または、その運用の上に、個的國家主義の面影が見えぬでもないけれど、その集つてをる意識的の人たちの境地を超えたところに、國家を超えた國際的な大きな心の潮が流れよせてをるやうな氣がします。たびたび行はるる萬國勞動會議なども超國家的思想の一傾向だと思ひます。今日、直ちに個的國家の防備を撤去するこ

とが出来ないにしても、この世界に存在してをる個的國家のすべてが、
偏狭なる國家主義によつて、その存在を確めることが出来ないといふ
ことだけは明かになつてをります。社會主義の人たちがインターナシ
ヨナルの會合を屢々催すことも超國家的思想の傾向を現はしてをるも
のではなからうか。

非國家主義者がインターナショナルの會合を開くのは勿論のことと
しても、國家主義者として赤十字社に加盟し國際聯盟に加盟し萬國勞
働會議に代表者を送らずにはをられないやうな傾向になつてをる、こ
れらの傾向は、國家としても生存競争の思想のみによつて進むことが
出来ず、相互扶助の思想によつて維持されねばならぬといふことを表
明してをるやうに思ふ。今日どんな國家でも國家を超えた思想なしに

は國家を維持して行くことが出来ないといふことを、これらの事實的
傾向が語つてをるのではないだらうか。

六。

國家における學者・思想家・藝術家・宗教家などは、國境を超えたもの
である方が彼等自身の本來の性質にもかなふことであり、彼等がその
性質にかなうて行くことが國家としても結構なことだと思ひます。學
問に國境はありません、藝術にも國境はありません、宗教にも國境が
ありません、彼等は概ね超國家的な方面に頭腦を働かしてをります。
一國內に國境を超えた學者や思想家や藝術家や宗教家を有すること
は、如何にその國家を大きくし永久にするかもはかられぬのでありま

す。個別的國家の生存のみに腐心する國家主義者が多くなつたときに、國家は他の國家から滅亡せしめられる場合があるかも知れないが、超國家的な學者・思想家・藝術家・宗教家の群り出でてをる國家は、他の國家から滅亡せしめられることが決してあるものではないと思ひます。或人は、國民がすべて國家を超えた考をもつやうになるならば、國家が滅亡するといひます。なるほど、古い國家は滅亡します、しかし、永遠の眞理を探索する學者・普遍的な愛を確信する宗教家の一團の形ち造るところの大なる國家はそこから新しく生れ出るに違ひはあるまいと思ひます。なまじつか學者や藝術家や宗教家が國家主義的になることは、却つて、その國家を殆うすることになるかも知れませぬ。彼等は常に國家を超えた見地に立つて自國と他國とを共に自己の内に取

り容れて、宇宙大の國家をその意識の上に建設することを忘れてはならないと思ひます。かうした人が多く國家内にをることは、國家をして相互扶助の平和境にあらしめ、大きな、また、永久なる國家たらしむる所以ではないであらうか。この意味において、私は、吾が日本の國にも、どしどし國家を超えた學者や藝術家や宗教家の輩出することを望んでやまないのであります、しかして彼等の輩出することは日本が大日本となる所以であると思ひます。

七。

私は、日本の國の土地に日本國の米を食うて生きてをる一人であります、また、私は、日本の神話の上に現はれたる祖先の思想をなつか

しく思うてをるのであります、しかし、私は官吏でもありません、政治家でもありません、むしろ、私の心は、常に吾が日本を思ふやうに、我が支那を思ひ、我が印度を思ひ、我が露西亞を思ひ、我が宇宙を思ふ傾向があるのであります。私の考は常に國境を超えてをります、であるから、國家主義者ではありません。尤も、外國の思想を模倣するが爲めに、日本固有の風俗・習慣・信仰等を抛つといふやうな浮薄な人と伍することは好みませぬ、しかし、私は日本のみの存在を考へて、他國の存在を容すことの出来ないやうな、日本以外の國を敵國として考へるやうな國家主義に同ずることは出来ませぬ。私が支持するところの釋尊は、印度の釋尊でもなければ支那の釋尊でもなかつた、人類の釋尊であつた、世界の釋尊であつたことが嬉しいのであります。キ

リストにしても、ユダヤの思想に養はれつつユダヤを出でて世界人となつた彼の魂がなつかしいのであります。私は、小さな愛國者ではありませぬ、しかし、私の心には所謂愛國者以上の大きな愛が湧いて、日本國と同時に他の國々をも心の内に攝取せずばやまないものであります。こんな心をもつてをる私が日本の國にをるといふことが、どれだけ日本の國を大にし永久にするかも知れないと信じてをります。私のやうな超國家的な考をもつてをるものが、この日本の國にをるといふことが、日本の國としてどれだけ幸福なことかも知れないと思ひます。私は、私のやうな超國家的の思想家がいくらでもたくさん出て来てくれれば、それだけ日本の國が大きさを加へ壽を加へて行くことと信じます。國を超えたるものが國に對する働きは、國にあるもの以上の貢

献をしてをることを思はずにはゐられませぬ。

國家として、その國民に超國家的な思想家を有しないといふことは、その貧弱な内容を暴露してをることになります。その國民に超國家的な思想家が輩出してをるそれらを容れ養うて、しかも、自己の存在に何等の牴觸を感じない個別的國家が最も偉大なる國家であると思ひます。私を容れることによつて日本は大日本になつて行くことを信じます。だから、私を生んで育ててくれた日本を思ふ場合にも、私はますますこの日本を超える心の方に精進せねばならぬと思ひます。國境を超え民族を超えた心の世界を有するものが、もつともつと日本の國に生れて來なければならぬと思つてをります。腹の小さい國家主義者などが危険思想家呼ばはりをして恐ろしがつてをるやうな非國家主義者

であつても、決して恐るるには及ばないと思ひます。彼等によつても吾が日本の大はますます加はつて行くことと信じます。

こんな思想の當然の歸結として、私は、國境を超えた學問・藝術・信仰の吾が同胞の間にますます盛に燃え立つて來ることを、吾が大日本のために念じてやまないであります。それから、また、大日本に育まれた私は、ますますこの日本に局限せられない超日本的な大きな世界を發見し、そこに精神的な呼吸をして行きたいと念じてをるのであります。かうすることが、吾が祖先に報ゆる道でもあり、また、吾が師たる佛陀に對して酬ゆる道でもあると確信してをります。

一五。虚無の底から

一。

何も考へないですんでをるうちは、人生は苦しくもなければ楽しくもない、寂しくもなければ賑かでもない。私たちがやや知覚が明かになつて、自己に對するあまたの周囲を感じるときに、賑かな嬉しい心になる、それが、十歳から二十歳までくらの男女の心的状態である。尤も、人によつてその趣の違つたもののあることは勿論であるが、まづ大抵十歳から二十歳までくらの間は、楽しい時代である。二十歳前後になると周囲が自分に對して障害であることを感ずるやうになつ

てくる、ここに苦痛の感じが起り厭世的な思想が起り世の一切を呪ふやうな氣持が湧いてくるのであります。二十歳前後から私たちの心が極端なヒユリタンの心と極端な厭世思想とが芽生えてくるのである。この思想は私たちに寂寥の感じを與へるのである。人生は苦しいところである、人生は思ふやうにならぬところである、人生は寂しいところである、といふ思がそこはかとなく起つてくるやうになるのであります。この寂しさの心に、神の愛とか佛の慈悲とかいふローマンチックな信仰は一時的の安らひを與ふるのである。しかし、かうした青年期の信仰の歡喜時代も三十歳前後になつて世の中に對する經驗が豊富になり考ふことも深まつてゆくにつれて、かうしたローマンチックな信仰的歡喜に酔うてをられなくなつてくる。ここにおいて沈痛

なる寂寥感が襲うてくるのであります。

最初には、世の中の一切があてにならぬことを感じ、自己の身体も思想もあてにならぬことを感じて、自己以外の神や佛の慈愛を信仰することによつて一時的の逃避が出来るのであるが、人生の眞實相が分つてくるにつれて、かうした慈愛にも酔うてをれなくなつてきて、その神や佛に對するローマンチックな信仰もくづれ、最後の頼り場となつた神佛の慈愛も頼るべからざるやうになつてくるときに、人生のどん底に投げこまれるのであります、そのどん底にうごめく自己を發見するやうになります。この時分にはもはや寂しいといふことがいうてをられないほど、寂しさが迫つてをります、恐ろしいというてをられないほどに恐ろしさが迫つてをります。かくて、この境地に入つたと

きには、寂しさを超越し恐れを超越するやうになつてくるのであります。

二。

人間の恐れも悩みも寂寥も、それをぢつとみつめると死の恐れといふ正體が現はれてきます。自己の前に死を見るときに恐れをいだきます。自己の前に死を見るときに寂寥の念にうたれるのであります。人の死を見て寂しさを感じ、人の自分を離れゆくにあうて寂しさを感じ、自己の孤獨を感じて寂しさにうたれ、自己の病氣を病んで寂しさに襲はる、これらをぢいつと見つめるときに、いつでもそこに死の恐れの影響の動いてをることに氣がつくのであります。

生物としての私たちには、何としても死は最大の恐れであります。沸騰した湯の中に冷水をさすと沸き返った泡が消えてゆくやうに、人生のすべての沸き立つた歡喜の泡の上に一滴の死の水がおとされたときに、私たちの心はしいんとして静まり返るのであります。そこに湧いてくる思が堪へがたい寂寥の念であります。すべての生物の當然の歸結として死は待ち構へてをる、故に、すべての生物は、その死に當面せずにはおられない、従つて寂しさに襲はれずにはすむわけにはゆかないのであります。思想の發達しない生物にあつてはさほどではないかも知れないが、思想の緻密になり感情も鋭敏になつてをる生物ほど寂寥の念にうたれることが多いのであらうと考へられます。

同じ人間でも深く考へる人、鋭く感ずる人は、あまり深くも考へず

感情の鈍い人よりも寂寥を感ずることがひどいと思ひます。或人が、寂しいといふ感じがはつきり分らないというてゐた、そのときに、私は、この人ならばさうだらうと思つた。實際、この人は、寂しさを感じずるほどに思想が發達してをらず、感情が鋭敏になつてをらないのであります。かうした人は所謂醉生夢死でのんきな一生を送ることが出来るかも知れない、ただ、事に當つて物理的な苦痛を感ずるくらゐにとどまるであらう、物的感覺に痛むくらゐですんでゆくかも知れない。しかし、思想が緻密になり感情の鋭敏になつてをるものが日々に見聞するすべてのことによつて、生死無情の相を感ぜしめられ死を感ぜしめられずにはをられないのである。従つて、強い寂しさに襲はれずにはをられないのであります。身に迫るやうな寂しさを感ずるものは思想

の方面においても、感情の方面においても、大分進んだ人だというてよいと思ひます。

三。

むかし、雪山童子は、ヒマラヤの山林にはいつて、どこともなく、

諸行は無常なり

是れ生滅の法なり。

といふ語を耳にしました。さうして、その語のいかにも人生の眞實を穿つた言葉であることに感じ入り、誰がこの語を吐いたかとたづね廻つてをるうちに、ふと恐ろしい鬼に出合ひました。雪山童子は、この鬼に對して、誰が「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。」といふ語を

語つたか知らないかとたづねると、鬼は、私がそれを語つたのだといふ、では、その次に残された語を聞かして貰へないかとたづねたところ、鬼は、自分は今あまりの空腹になつてをるから、その次を語るころが出来ないというた。雪山童子は、その次の言葉を聞きたくてたまらなかつたので、汝の欲する食事を何でも供養するから次の語を聞かしてほしいとたのんだ。すると、鬼は、汝がもし次の語を聞きたいと思ふならば、汝の身體を私の食として供養するがよい、さうしたならば次の言葉を語り聞かさうというた。童子はこの場合自分の肉身の生命を顧みるひまはなかつた。では、この身體を汝の食として捧げるから、是非とも次の語を聞かしてほしいとたのんだ。すると、鬼は、徐ろに次の語を語つた。

生滅滅し已つて、

寂滅を樂しみとす。

といふ。これを聞いて童子は喜びにたへず、やをら身を躍らして鬼の口に入らんとするとき、鬼はたちまちに佛教守護の帝釋天といふ神の相を現はして、その志の勇ましさを賞讃しました。この話は、『涅槃經』に記してある話であります。この「生滅滅し已つて、寂滅を樂しみとす。」とある語は釋尊が命がけの歸依をもつてお出になつたことを記した話であると思ひます。

生滅滅し已つて寂滅を樂しみとなす。讀めば讀むほど味ひのある語であります。生があつて滅がある、そこには、まだ悲しみが痛みがあり寂寥があります。尤も、「諸行は無常なり」と語り出したところ

に、すでに無常生滅の上に流れるところの生命の水の漂うてをること、萬物を諸行というた言葉の上にほのめいてをるのであります。行は生活を意味します。諸の生活者はすべて無常である、すべて生滅する。この語はすべての生あるものに對しての冷水とも味はれる語である。浮世の歡樂に酔うてをるものの頭腦には、この語は水の滴る秋水のやうな鋭さをもつて迫つて行くのである。私たちが、自己の生命を内省して、無常を感じ生滅を感じたときに、どうしてもちつとしてをられない悲しさと寂しさに打たれるのであります。そこにちつとしてをられない求道の念が湧いてまゐります。その寂寥を超越する道こそ人生の悲しさと寂しさに沈んでをるものの聞かうとするところであります。雪山童子が自己の生命をも賭して次の語を聞かうとしたと

いふことは、偶々私たち人間のその道を求めるためには、水火も辭してはをられない心的傾向を表示してをるかのやうに考へられるのであります。「生滅滅し已つて、」ここが面白いところであります。生滅が滅し已る、そこには生がない、生がないから滅もない、かつて、清澤先生の御存命のをりに、私は「生れざれば死せず。」といふ語を考へて先生に書いていただいたことがある。それが今も軸物として私の珍重するところであります。生れた始があれば、死ぬる終がある。死があるから生があるといふことは、生があるから死があるといふことと同時に考へられねばならない命題であります。生も生の一面であると同時に、死もまた生の一面である。清澤先生が「生のみが吾等にあらず、死もまた吾等なり、吾等は生死を併有するものなり。」と記されたことを

思ひ出させられます。吾等は生死を併有す、何とした偉大な達観であらう。吾等は生死を併有するが故に、先生が次の語に語り出さるるやうに「吾等は生死に左右せらるべきものにあらず、吾等は生死を超越するものなり。」といふ語が出てくるのであります。この生死を超越する心が即ち生滅滅し已るところの境地である。生がなければ滅もない、ここに絶対の死がある。絶対の死は虚無である。虚無には生がないやうに、また滅がない。だから、悲しむべき死もなければ喜ぶべき生もない。この境地が所謂寂滅の境地である。この寂滅の境地こそ生命が白熱的の相をもつ境地である。雪山童子が肉體を賭してこの語を聞いたといふことに深い意味があるやうに考へられます。この肉體が死にきつたとところに寂滅があるのであるまいか。生のあるところには決

して静かさはない。生の前には滅があり死がある。だから、悲しさとは常につきまとうてくる。その悲しさのどんだ底、これまでは生に立つて死を見、滅を見たときには、死と滅とは生の外のものではないので、つたから、生の方からは危ぶみと恐れが出て来ずにはゐられないのである。ところが、その前において恐れてをつた死の境地・滅の境地に沈みきつたときに、もはやそこには恐るべき死と滅とがないのである。生が滅にいつたときに生がなくなると同時に恐ろしかつた滅もなくなります。だから、この滅の境地こそ、この寂滅の境地こそ、最も楽しい最もゆたかな境地ではあるまいか。寂滅を樂しみになすといふ境地は、すべての生を抛つて窮極の死滅にはいり虚無の境地にはいつたものにして、始めて味ふことの出来る安樂境であると思ひます。

四。

私は、この頃、寂滅を樂しみにするといふ語の味ひがよく分るやうであります。寂滅を樂しむとす、讀んでゐても魂が雀躍りするやうであります。

秋になりかけた時分に、桐の一片二葉がおち初めます。それから、いろいろの葉が紅葉をして先を争うて散つて行きます。その相をみるときに、私たちは所謂秋の哀れなるものを感じます。さうして、寂しさが身にしむやうになります。秋がだんだん更けていつて、もう冬にはいると、木の葉はすべておちつくして、常盤木でないすべての木は眞裸になつて立ちすくんでをります。どんな強い木枯が吹いてきても

危ぶげのない身構をして立つてをります。雪が降り積つてきても押しつぶされないやうに輕装して待つてをります。もはや、彼等の上には、滅し已つて滅すべきものがなくなつてをるので次の生の生命が芽ぐんでをるのであります。この冬木の相をみて私は寂滅爲樂の心をしたばしめらるのであります。葉が落ちつくした後には、もはや葉の落ちるといふ哀れさ寂しさがなくなつてしまひます。別れねばならぬかも知れない、死ぬかも知れないといふところには、恐れと悲しみと不安とが相次いで起ります。しかし、いよいよ別れてしまひ、いよいよ死の窮極に立つたときに、もはや恐れとして認識するものがなくなつてをるので、その端的に強い寂寥も襲うてくるのであるが、その寂寥そのままに強い力となつて現はれてくるのである。寂寥がそのまま

光となつて現はれてくるのであります。寂しさを去つた後に明るくなるのではなくて、寂しさの底に沈みきつたところに、寂しさが樂しく寂しさが明るくなつて、寂しさが光つてくるのであります。この感じを味ふときに、私は、生滅の境地を超越した古への聖者が自己の境地を「寂光の淨土」と申されたことを盡きぬ喜びをもつて味はしめられるのであります。「法華經」における本門の釋尊が、自己の境地を寂光の淨土と申されたことに、深い味ひのあることをしみじみと感じてをるのであります。寂光の淨土といふと、いつかの年の暮に、落葉をふんで京の北山の大原の里に寂光院を訪うた日の澄みきつた空とすきとほつた池の水とを思ひ出すのであります。寂光何とした尊い言葉であらう。靜かな光、寂滅の光、寂しさのどん底にこそ、この靜かな光が拜

まれるのであります。一人静かに落葉の上に立つて澄みきつた空に枯木の枝から星の冴えわたるのを見るときに、私は、寂しさを感じます。そして、静けさを感じます。寂しさから引き起された静かさにとよめく心のすみきる感じを得ます。そこに魂の躍り出すやうなゆたかな躍動を感じるのであります。「本願を信受して前念の命を終り、即得往生に後念即ち生る」と『愚禿鈔』の中に親鸞聖人が記された、その命終の境地こそ、信心歡喜の法悅境が湧き出ることを思ひます。この點からしてこの肉身の彼岸にこそ眞實の報土があるといふ法味にも動かすことの出来ない眞實味があるやうに思ひます。

五。

『無量壽經』に法藏菩薩の本願成就の淨土の相がこまごまと説いてある、いろいろの光輝ある寶玉の世界を説き去り説き來つて、この世界は「無爲泥洹の世界に次し。」と記し、すすんで「虛無の身、無極の體」と記してあるところ來つて、私は寂光の土を思ひ出さずをられないのであります。虛無の身、無極の體といふところに生滅滅し已つた相が現はれてをります。寂滅の境地が記されてをります。この境地こそ無爲涅槃であります。この寂滅の上に輝く光、その光の上に現はる樂しみの境地を形の上に歌ひ出すならば、『無量壽經』のあの光彩陸離たる金・銀・瑠璃・玻璃・砗磲・赤珠・瑪瑙をもつてちりばめた世界となつてくるのであります。

最も寂しい心の底に最も静かなる泉が湧いて出ます。この静かさの

中にひたるときに、私は最も力強いものを感じます。何の恐るるところもない何の危ぶむところもないゆたかなのびやかな境地を味ふのであります。無障無礙の世界、何物にも妨げられることのない自由の世界は、この虚無の世界においてのみ味はれるのであります。寂滅の境地にあつてこそ妨げがなく恐れがなくなるのであります。すでに生を所有せず、だから、恐るべき死もなくなります。すでに恐るべき死がなくなつたときに、世に恐るべき何物をもとどめないであります。死を思うて寂しさにうたれた心は、死にひたつてそれが静かさとなつてきます、その静かさのうちにすべてが躍り出します。そこには、所謂生もなければ所謂死もない。生なく滅なく、常なく無常なく、空々寂々、一物をとどめざるがゆるぎに抵觸する何物もない。一物のあれば

こそそれに対する迫害もあらうけれど、すでに一物をもとどめない境地にあつては、迫害する何物の存在もなく迫害を受くる何物もないのであります。

空なるかな、空なるかな、虚無の静かさ、何とした明るい世界であらう。自由とはこの世界にのみ容るされる語であるやうに思ひます。

六。

親も去れ、妻も去れ、敵も去れ、味方も去れ、みなゆけ、みな我をおいてゆけ。さうだ、我が肉身も我をおいてゆけ。勿論、我が財産、我が學問すべてがゆけ。我と思うた我もゆけ。能觀も去れ、所觀も去れ、すべての遠慮も去れ、分別も遠ざかれ。ああ虚無、おお寂滅、もはや

恐れのとどまるところもない、寂寥の巢くふ場所もない。ここに生れ出るものは、すべての執を去つたあるがままの人生、生でもなければ死でもない、寂滅そのままの人生、この人生には何物にも陰影を受けることの出来ない光輝を放つてをります。かくて、虚無の自己は虚無の世界に永遠の發光體となつて燃えさかるであらう。そこに生あり滅あり、生れて生に煩はされず滅して滅に煩はされず、持つて持物に煩はされず、持たずして持たざることに執せず、あるがままの生命の流れ、この流れはいたつて静かである。この静かさに輝く光、寂光の淨土とは何となつかしい語であらう。寂光土の生活者としての自己を發見するときに、冬空に青く光る月光のやうなほほゑみを禁ずることが出来ない。さうして、そのほほゑみの間より夏の日の眞晝の日光のや

うな白熱の力を感じずにはゐられないのであります。

力よ、命よ、光よ、虚無の上にこそ、寂滅の上にこそ、ああ静かなる心の光、私はすべての去りゆくものによつて残されたこの寂光の心境を喜ぶとともに、すべての去りゆくものの上に深甚の感謝の意を禁ずることが出来ないのであります。(大正一四・二二・一)

二六。天を司る者

一。

梅の實が熟する頃であつた。或日の夕飯後、庭に遊んでゐると、母も庭に出て來られた。私は、外の友達と遊んでゐた。母は、村の人と話してゐた。そのをりの私の友達に誰であつたか覚えてはゐない。母の話してゐた人も誰であつたか覚えてゐない。ただ、母と私と庭にゐたことだけがはつきり記憶に残つてゐる。それから棕櫚の黄な花が足元に散らばつてゐたこともはつきり覚えてゐる。空には一つづつ星が見えて來た。もうとつぷり暮れたのに、母も私もまだ庭にゐた。する

と、俄にそこらが明るくなつて、空を赤い火玉が飛んでゆくのが見えた。私は、驚いて、あれは何ですかと母にたづねた。母は、誰かが地獄へ墮ちたのだといひ、あの赤い火玉は人間の靈だといひました。私は、何かしらぞつとするやうな氣がした。家に入つてから父にそのことをいふと、父は、それは流星だといひて聞かせました。たしか、そのをりに太陽は火の塊であり月は水の塊であるといふことも聞かしてくれただやうでした。これは、私の七八歳の時分のことです。母は、また、をりをりお日さまは勢至さまで、お月さまは観音さまだといひて聞かせました。子供の頃にかうした両親の話を書いて育つて來た私は、今もこの二つの教に心が育てられてをります。或時代において、この二つのことが別々のことで、むしろ、反對したことのや

うに思うてゐたのだが、この頃になつてみると、兩方とも同時に味ひ得るやうになつてをるのであります。とにかく、空の太陽と月と星とは、少年時代の最初の疑問であり、また、最初の興味でもあつたのであります。

父は、をりをりちいつと空を見つめてをる人でありました。人に對して何か心にかかることがあるか、氣にくはぬことのあるときには、天を見るがよい、天を見ると狭い心が廣くなつて來るものだというてをられたことを、今もおぼろげに覚えてをります。

天・空、とにかく子供の最初の驚異は日・月・星辰であります。子供の最初の驚異は、やがて原始時代の人達の驚異であります。古い時代の人々は、太陽と月と星とに對して神祕の感を懷いてをりました。日本

の天照大神・支那の黄帝・印度の梵天・ペルシヤのアフラマズダ・埃及のオシリスヌウ・ユダヤのエホバ・ギリシヤのゼウス・ローマのジュピター、すべてが太陽の神話ではあるまいか。それから、天體を觀測してそれについて人間の運命を考へるところの曆學や占星術も、ずゐぶんその源は古いやうである。西曆紀元前、四千年頃に出來た埃及の大ピラミットが天文觀測所であつたといふことが近來分つて來たといひます。印度でも支那でも、曆法は相當に古い起原をもつてをります。夜が來り、晝が來り、冬が來り、春が來り、夏が來り、秋が來る。太陽が東北隅から出て西北隅に没することがあり、東南隅から出て西南隅に没することがあり、或は頭上を通ることがあり或は側面を通ることがある。かうした天體の變化によつて、人間自身の運命が或關聯をも

つことを無關心に通るわけにはゆかなかつたのであります。ここに天
文學の起原があるのであります。

二。

今から三十二年前に、私は、ガイキの書いた『地文學』を習つたをり
に、太陽・地球・月などのざつとした關係を聞きました。その後二三年
にして學校で天文の概要を聞いたこともあります。その後、かうした
關係の書物を一向手にしなかつたのであるが、いつかは、この天文學
の方面から自己省察の歩武をすすめてゆかねばならぬといふことを考
へてをりました。ところが、近來眼がわるくなつて、いくら晴れた夜
でも星をはつきり見る事が出来なくなつたので、到底精密な天體の

觀察は不可能になつて來ました。それに、自ら書物が讀めないので、
外國文で書いた書物によつて天文を學ぶことが不可能になりました。
しかし、近來吾が國でもこの方面に造詣の深い人が出來て來たのと、
或一面にかうした研究の興味が加はつて來たために天文に關する著書
が相當に出てをるので、それらを集めて正月に入つてから讀んで貫
つてをります。讀んでくられる眞田君が以前から天文學に志してゐ
たので、聞いてをるうちに分らぬところををり聞きかして貰ふこと
が出来るので、よい便利を得てをるのであります。しつかりと天文を
學ぶには、豫備知識として數學・力學・光學等の準備がなければいけな
いのであります。しかし、私は、さうした準備をもつて、また、望遠
鏡等の力によつて新しい觀察をして學んでゆくといふことは到底出來

ないのでありますが、東西古今のこの學にすすんでをる人達の研究の結果或はその過程を聞かして貰つて、そこに、私自身の眼を開かして貰はうと思ひ立つてをるのであります。

三。

天文の書物を読んでをると、いつの間にか心が大きくなつてゆくやうに思はれます。取扱はれる問題が日・月・星辰であり、私たちが大事件のやうに思うてをるこの地球も小さな一點として考へられるのでありますから、いつの間にか心が廣々となるやうに思ひます。

今日天文学によつて知られてをる地球の直徑は約三千二百里であります。月の直徑は約九百里であります。そして太陽の直徑は約三十五

萬里であります。太陽と地球との距離は約三千八百萬里であります。光の傳はる速度は一秒時間に七萬六千里であるといふのですから一秒時間に地球を七廻半するのです。また、光が太陽から地球に達するまでには八分二十秒かかります。それから今日知られてをる最も近い恆星はケンタウルス座のプロキシマ星であつて、その近い距離でもその星から地球に光の傳はるのに四年餘りかかるさうです。最も遠いのは何萬年もかかり、更に遠い遠いあなたに、吾々の見てをる銀河系に匹敵するやうな別の星系が見える、光がそこからこの太陽系に達するまでには何百萬年もかかるといふことであります。

かうした廣い記事を読んでをると日本ぢや、支那ぢや、露西亞だ、亞米利加だといふやうに争うてをることが何だか小さいことのやうに

感じられるやうになつてまゐります。敢て非國家的といふのではないが、さうした問題に齟齬してをる愚かさを思はしめられるやうになつてまゐります。殊に一家内のことや自分等人間たちの間の利害得失は何のこつたといふやうな氣がしてまゐります。天體の研究をしてをると、人間の日常事がいかにも小さなことのやうに考へられてまゐります。

私たちが天體を研究してをるときには、私たちの精神は天體を内に入れてをります。すると、天體を研究する私自身は、天體以上の大きなものになつてをります。さうした大きな心の中に映つて來る國家・家庭などの問題は、至極微小なものやうに考へられてまゐります。さうしたことに心を亂してをることが何となくばかばかしいやうな氣

になつてまゐります。

近來の研究によると、太陽表面の黒點の多少が吾が地球にいろいろの變化を起さしむる原因となるといふことである。さうしたことを思ふと、人間同志が寄つていろいろの計畫をしてをることが何かくだらないやうな氣がしてをります。パペルの塔といふことなどが思はれてまゐります。達觀といふ言葉があります、かうした氣持も天體の研究によつて或點までは達せられるやうな氣がします。天文の本を讀んでをると、氣にくはぬことがあるときには天を見るがよいといふ父の言葉がひしひしと思ひ出されてまゐります。

地面が動くか天が動くかといふことは天文学の二大思想であつた。印度・支那の古い天文学は天動説であつた。エジプトの天文学も天動説であつた、即ちかのトレミーによつて大成せられた観のあつた天文学は、天動説の一丝亂れざる確かさを語るが如く思はしめられて來た。ところが、第十五世紀の末にコペルニクスが地動説を考へつき、次第第十六世紀から七世紀へかけてガレリイやケプレルが考をすすめ、遂に今日となつては地動説に對して誰も疑をさしはさまないやうにまでなつて來たのである。今日の天文学は天動説に對する地動説といふよりも、天動地動説といふ方がよいやうに思ひます。太陽が、朝東から出て夕方に没するのを見ると太陽が動いてゆくやうに思はれた。ところが、いろいろの研究によつて、太陽が運くのでなくして地球が西

から東へ廻轉するのであると考へられるやうになつた。その點で地動説といふのである。しかし、月と地球との關係からいへば、昔の人は地面が動かないで月が動くと思つてゐた。その關係は今の考でも間違はないことになつてゐます。地球が動かないで月が地球のぐるりを廻轉してゐるといふのであります。すると、月と地球との關係においては、今も尙天動説であるともいはれます。星の上にかかつて來ると或星は地球と共に動き或星は地球に對しては動かぬかの如く見えるのである。

天文学者は星を分て恆星・惑星・衛星・彗星・流星の五つとしてをります。この内の惑星といふのは太陽を焦點として楕圓を描いて太陽の周圍を廻轉してをる八つの星であります。即ち水星・金星・地球・火星・木

星・土星・天王星・海王星であります。その外に火星と木星との間にも肉眼に見えない小惑星が約千個ほどあるといふことであります。さうするとずのぶん惑星もたくさんあるわけになります。衛星といふのは、月が地球に對して廻轉してをるやうに各惑星の周圍を橢圓を描いて廻轉してをる星であります。それが地球に一つ、火星に二つ、木星に九つ、土星に十、天王星に四つ、海王星に一つあることは今日知られてをります。彗星といふのは俗にいふ彗星のことでありまして。これまたやはり多く橢圓の軌道をもつて太陽の周圍をめぐつてをるのであります。中には拋物線や双曲線の軌道をもつて太陽から遠く去つてかへらぬものもあるさうです。この外に流星といふのは夏から秋にかけてよく見えるところのものであつて、あの見ゆるときには、空中に浮遊し

てをる發光體でない微小な星が地球の周圍氣にふれて焼かれ熱を發し光を發するのだといふことであります。青梅の熟する庭で私から人靈だと聞かされたのはこの流星であつたのであります。太陽系といふと太陽とそれを廻つてをるところの惑星と衛星と彗星と流星群とを引くるめていふのであります。この太陽と同じ状態にある星を恆星といひます。たとへば、北極星のやうな星は昔の人によつては動かない星であるとせられてゐたのであります。しかるに、今日の研究ではすべての恆星が動くといふことになつてをります。従つて太陽も天の或方向へ動いてをるといふことになつてをります。もつと研究が積んで來ると、惑星・衛星・彗星の一群を引き連れた太陽が、また一つの焦點のまはりに橢圓運動をしてをるといふことが發見せられるかも知れな

い。それがまた、何とかいふ體系をなしてをるやうにも思はれます。その體系がまた或焦點をめぐつてをるかも知れない。かうして考へてゆくと、結局、大宇宙には一つの重心がなければならぬと考へたくなつて來ます。しかし、それは考へてをる自己自身の投影であるやうに思はれます。自分の頭腦から觀察し出した、つまり、頭腦に開けた天體なので、それを一元に歸するといふことは、もとの自己にかへつて來る思想のやうに思はれます。天體自身はさうした一系統で組織してゐないのかも知れない。しかし、人間としては、一元的に考へたい傾向があるやうであります。

五。

天文學者の研究を聞くと、宇宙間のすべてが動いてをるといふことを教へられます。天上に羅列してをるあの多くの天體が、すべて自轉と公轉との二つに動いてをるといふのです。その動くにはそれぞれの法則があつて一絲亂れないといふことであります。それぞれの星がそれぞれの方に自分自身の道を歩いてゆく。さうして互に相侵すことがないやうになつてをるといふことであります。さういふことを聞くと一つ一つの星が一つ一つの生物のやうな感じがします。人々の運命が人々に附いてをる星の上にかかつてをるといふ信念なども、この感想に基づくものであるまいかと思はれます。

釋尊は、「諸行無常」と申されました。これは、萬物はみな動くといふことであります。生物も動く、天體も動く、大なるものも動く、小

なるものも動く、すべてが動いてをる。面白いことでもあります。物理學者の説を聞くと、靜止してあるが如く見ゆる物體の中にも、その原子は常に動きつつあるといふことでもあります。さうして、すべての物體の變化は性質の違ふいろいろな元素があつてさうなつてをるのでなくて、同一性質の單元的元素がその配列や密度の具合によつていろいろの變つた相を現するのであるというてをります。物の變化は質の問題でなくて量の問題であると考へてをる人があるのであります。平たくいふと、すべてが程度問題であるといふやうになるのであります。そして、すべてが單元的であるといふのであります。この點は、天文學者が天體の體系を一に考へたくなつて來るやうに、極微の研究者もそこに一元の世界を發見せずにはをられないやうになつて來る傾向を

見せられるやうに思ひます。これまた研究者が自己にかへつて來る相ではあるまいかと思はれます。神を考へるものは遂に一神に到達するもの、この考と類したものであつて、やはり、自己にかへつて來る相であると考へられます。

太陽も動く、地球も動く、月も動く、恆星も動く、あの偉大なる銀河も動く、三千大千世界が同時に動く、そして、それぞれの動き方もつて動く、そして、また、それぞれの軌道をもつて動く。しかも、互に相侵すところのない天體を見て何だか吾々自身の生活相を教へられるやうな氣がします。

英國のニウトンは、かく天體が互の位置をたもつて運動してをるのは相互間の引力に基づくのであるといふことを考へ出しました。その説によつて、今日の天文學が確かな認識を得るやうになつたといふこととであります。月が地球の周圍をめぐり、地球が太陽の周圍をめぐり、その他の衛星が惑星をめぐり、惑星が太陽をめぐつてをる。それらの軌道の整然として亂れないのは、それらの天體の間に互に相引く力があつて互に索制せられて一絲亂れざるやうになつてをるのだといひます。物體が二つばかりあると考へて見ると小なるものは大なるものに併吞せられてしまはなくてはなりません。ところが、それが併吞せられないのは、小なる物體でもそのもの行くべき方向があるのである、その方向へ行く力は偉大なものであつて、他の引力によつて併吞せら

れないほどの力をもつてをる。もし、その力がないならば、小なるものは大なるものに併吞せられなくてはならないのである。地球が、太陽の周圍に楕圓を描いて廻轉するのは、地球自身の進まんとする力が太陽の引力に曲げられて太陽の周圍を廻轉するやうになつてをるのである。しかし、地球自身のすすむ力が相當に大きなものであるがために、永久に太陽に併吞せられることがないといふのであります。

この考を人間相互の間にあてはめて考へて見ると面白いと思ひます。大なる人間と小なる人間とある。その間に互に引力があつて大なる者は小なる者を引かうとします。しかし、小なる者は、小なる者で特別の生命力をもつてをります。だからして、決して併吞せられるやうなことはありません。しかし、大なるものの力に引かれてその周圍

を廻轉せしめられることはあります。地球が太陽の周囲を公轉するのは、地球自身の生命力と太陽の引力との相寄つた相であります。吾々の人間同志の間において考へてみると、小さな者が大きな者に引かれるときに、小さなものは大きなものの周囲を廻轉します。しかし、小さなものにも、相當の生命力があるので、決して併吞せられないのであります。資本主の引力に引かれてプロレタリアはその周囲を廻轉します。しかし、プロレタリアにはプロレタリアの獨特の生命があるので、いつまでも併吞せられることはないのであります。無理にこれを併吞しようとするならば、ここに斥力が現はれて來て、はげしく離れようとするのがプロレタリア自身の生命力の發露するところであります。いつまでも地球が太陽に引かれつつ、その軌道をすすんで併吞せ

られないところに人間の生存權といふやうな問題も考へさせられます。匹夫もその志を奪ふべからずといふやうな言葉は、この間の消息をもらったものではありませんまいか。かくて、宇宙間には、互の引力とその個性の力によつて互に併吞せられることのないやうに、うまく成立してをることが考へられます、面白い現象であります。また大きな人格者のめぐりには、それを焦點として廻轉する多くの人格者を有する、それらの人格者には、また衛星のやうな他の人格者がめぐつてをるといふやうなことも考へられます。今日の佛教とかキリスト教とかマホメット教とかいふやうな所謂宗教なるものは、太陽系といふやうな一つの大きな天體系であつて、佛教のうちの眞宗とか日蓮宗とか禪宗とかいふやうなのは、釋迦といふ太陽の周囲を廻つてをるとこ

ろの親鸞とか日蓮とか道元とかいふ惑星であり、その惑星の周囲を所謂信徒といふ多くの衛星がめぐつてをるやうに思はれます。かやうに考へると、釋迦やキリストといふやうな恆星級の人たちも、また一つの系統をなして或ものの周囲を廻轉してをるかのやうに考へられる。その或ものは私自身でなければならぬと思ひます。天體の一大系統が我をめぐつてをるやうに、人格の大系統も我をめぐつてをるやうに感ずるのであります。釋尊が日々の生活の上に、印度の古來の神々であつた梵天・帝釋その他の諸天人が守護するといふやうに感じてをられたのも、親鸞が信心の行者には天神地祇も敬伏すると感じてをられたのも、ひとしく自己衷心の感想ではなかつたかと考へます。

七。

天文学を讀んでをると、天體がいかにも大きくして、地球がいかにも小さく、その地球のうちに棲息してをる私たち人間がいかにも小さく思はれます。しかし、また、かうした人間が自分の視力の限を盡し、大きな望遠鏡を製作して天體を觀測し大宇宙を自己の方寸のうちに組織しようとして企てる相を見るときに、人間の大きさといふこともまた感ぜずにはゐられませぬ。地球上に湧いた一微生物である人間は、一大體系をなしてをる宇宙の一中心であるやうにもなるのであります。かくて、私たちは、自分の上に小さな肉體の相と、それに宿つてをる大きな精神ともいふべき智慧の相とを見せしめられるのであります。

小なる自己と大なる自己と、いづれに吾等は自分を見出してゆくか。天文學などを讀んで天體の關係とか或はその組織とか或はその大きさ運動などの考究をやつてをると、いつの間にか自分が大きく成長してゆくやうな氣がいたします。そして、いつの間にか自分の心の上に大きさと豊かさとを加へて來るやうに思ひます。かくて、學問の研究は、自分の信念の上に偉大な恩惠を下すことを味ひます。

太陽は火であり月は水であるといふ考と、太陽は勢至であり月は觀音であり、無數の精神は諸佛の國であるといふやうな考とは、天體の觀測によつて自己の心を薰育せられるものにとつては、一つの味ひであるやうに思ひます。私は、天文學の書物をもつと讀まうと思つてをります。自分で觀測の出來ない私は、別に新しい見解を得ようとも思

ひませぬが、世界中の斯道に熱心な方々の研究を聞くことによつて、私自身の生活をより大きく培ひたいと念願してをるのであります。孔子が、格物致知といふことをいはれました、ここに科學と信念との一致點が教へられてあるやうに思ひます。學ぶ者は、學ぶことによつて自己を養うてまわります。大宇宙の天體を研究することによつて、宇宙を自己のうちにみてゆくやうな心を養ひたいと思ひます。太陽の熱をうけ太陽の光のうちに生活する人間が、人間自身の智眼を開いて、太陽を見、その他の恆星を見て、それらの運動までも測定し、そこに人間自身の光によつて世界を照してゆく生活は尊くはないでせうか。佛が、佛の光明を讚嘆して超日月光といはれた心持などを思ひ浮べてをります。吾々の肉體は自らの光に輝かない地球の上に棲んでをりま

す。しかし、自ら智慧の光に輝いて全世界を照してゆくのです。かかる人間は、自ら発光體となつてをるのであります。太陽の熱によつて成長する肉體の中から、諸天體に生命を與へ、諸天體の生命を撫育する熱愛を發散せしめるやうな心持を味ひたいと思ひます。

八。

天文の書物を読んで私の受けた教訓は、もつともつとたくさんにあります。決して、これにて盡きたわけではありません。今度はこれ位にしておいて、また、聞いていただくことにします。(大正一五・一・二二)

二七。立腹者の日記

暮の二十九日のことであつた。午後の三時に金澤の或家の法事が了るからその家に迎へに来て下さいと約束しておいたので、ちやうどその頃眞田君がやつて來た。今から本を買ひに行かうというて、眞田君の持物をこの家に來てをる人達に宅の方へ届けてくれるやうにたのんで、私たち二人は、久しぶりに本屋の店に立つ悦びにいそいそして、この家を出た。冷たい雨がしよぼしよぼ降つてをるのだが、さういふことは何も苦にならなかつた。

Xといふ本屋の前で電車を降りて、すぐその店にはいつた。新年の

賣出しの飾りがすつかり出来上つてゐた。そして、新版の書物がたくさんに列べられてゐた。かうして、本屋の店に立つ機会を多くもたない私は、飢ゆるものが食に出會うた態度で多くの書物を選び出した。眞田君もまた鵜の目鷹の目で自分の好きな書物や私の好きさうな書物を選び出してくれた。店をめぐつてをるうち、帳簿をやつてをる人の前に來ると、一人の店員が計算書が出来てをりますといつて眞田君に渡した。眞田君はそれをひろげて見てゐたので、私は何れあとから計算しますといふた。それから二階へ行つたり三階へ行つたりして、たくさんの本を選び出した。そして、それを帳簿をやつてをる人の前に列べて、歸りに持つてゆきますから荷造りをして置いて下さいといつて風呂敷を二つ手渡した。眞田君はあちらの本屋に行つて來るから

といつて店を出た。

雨の降る夕暮の街を元氣よく二人は新刊書のことなど語り合つて、YとZと二軒の本屋に立ちよつて、又たくさんの新刊書やかねてほしと思つてをつた本をたくさんに買つた。その荷物が相當に重いのであつた。電燈のついて暫くたつた頃、二人は、この上Xから本を受取つたら大變です松任の停車場からどうして行かうなどと嬉しく語り合つて、先のXの店にはいつた。一人の店員が眞田君を手招いてささやいた。眞田君はいやな顔をして、私の側に來て現金でなければ渡さないといふのですといひました。私も不愉快な氣がしました。いづれ、近いうちにお拂ひをするのと一しよに持つて來るから今日は渡してもよいでせうといふた。すると、その店員は、帳簿をやつてをる男が渡し

てはいけないというてゆきましたから現金でなければお渡しは出来な
いといふのです。この店は十年この方たくさんの本を買った店ではあ
るし、私の方からたくさんの委託品もやつてあるので氣樂に思うてあ
たところへ、かうした嚴格なことをいふので、誰がそんなことをいふ
のですかといふと、その店員は、だまつてをりました。では、また來
ますといつて、私ら二人は不愉快な心をもつてこの店を出ました。そ
して、Y.Zの二軒で買つて來た重たい本を下げながら、雨の降る街に
電車を待つてゐた。眞田君も不愉快な顔をしてをる、私も不愉快でた
まらぬ。月末の計算はいくらになつてをるのですかといふと百八拾圓
になつてをると眞田君がいひます。では、委託の品はと聞くと四百圓
ぐらゐでせうといふのです。すると私は一層腹立たしい氣になりまし

た。あまりひどいと思ひました。あの店はこの頃個人經營から株式に
なつて外見だけは盛になつて來たのである。とにかく、市で一等の大
店なのでたくさんの本を買ふものは是非この店の厄介にならねばなら
ぬやうになつてをるのです。あまり横柄すぎるとて憎い氣が起きまし
た。眞田さん、近日悉皆金を拂うてやつて委託品をすつかり取り返し
以後あんな店と取引しないやうにしませう、私らに對してあんなにや
るやうに多くの人に對しても相當に横暴をやるだらうから雑誌か新聞
を利用して不買同盟でもやつてあの店を潰してやらうぢやありませんか
かといふと、眞田君も面白いと賛成する。私は、その方法を考へてあ
た。だんだん寒くなつて來るし、松任行の電車は待てども待てども來
ない。そのうち、ふと自分を考へるやうな氣がした。すると、をかし

くなつて笑ひ出した。そして、今まで立腹してゐたことが、をかしく
てならない氣がした。突然だらだなあと叫んだ。

X店は營利會社である、營利會社は常に金錢の流通を圖らねばならぬことは分りきつてをる。こちらは四百圓も委託品をやつてあるからといふのと、この店は大店であるからといふので、書物代の拂が遅れでも平氣であたのである。YやZの家は店が比較的小さいから困るだらうと思つて、あまり負債の多くならないうちに拂をしてをるのだが、Xは大店だといふので拂が遅れてもよからうといふ氣もあつた。これがそもその間違である。Xは、店はいくら大きくても大きいだけに金が足るまいと思ふと、今まで大店だからよからうと思つてゐた自分の考の間違つてゐたことに氣がついた。それから、委託品はまだ全部金

にならぬのだし、こちらの差上げた本は全部發行所に支拂はねばならぬのであるから委託品に對して賣上代金を猶豫するのは困るといふ先方のいひ分もあながち無理だとも思へないやうな氣がした。先方は營利會社だ、でも、私は金錢によつて人と争ふことはいやだと思つた。金錢によつて人と争つて、また再びこの店と取引しないといふやうな窮屈なことをするのは馬鹿げたことだと氣がついた。そして、今まで腹を立ててをつた自分がいかにも蟲のよいやうに思はれた。

松任行の電車が來ないので汽車でかへらうというて停車場の電車に乗つた。驛につくと、汽車は發車の合圖をしてをる。急いで驛員の承認を得て無札のまままで汽車に乗つた。車中二人で一時立腹したこと
の愚かさを語り合つた、そして笑うた。來月に入つたら、ゆつくり相

談して委託品の計算もし、本代もすつかり拂つて、改めて委託もし、本を買うて来るやうにしませうと二人は相談し合うた。松任で汽車を降りて雨の夜道をたくさんの本を抱いて来るに堪へなかつたので、自動車を雇うて家にかへつた。そして二人が笑ひこけてだらぢやなあ、ばかだなあといひながら、家人とこの日の始末を語つて大に笑つた。この間にも今日Xの店で見えて来た書物のことが思はれてほしくてならないのであつた。人間が立腹するのは、自分の都合のよいやうに考へてそれが通らぬときに他を責める、そして怒る、そして苦しむ、そして人と別れて狭い天地にはいりこむのであるのだ。ばかげたことだ。自らに内省の眼が光ると、ただ自らを罵つて笑ふより外はないのである。かくして、大正十四年の暮の日がすぎた。(大正一五・一・二二)

二八。闘争を超えて

(大谷家の限定相続問題を前にして)

一。

釋尊がまだ十七八歳の青年で悉達太子とよばれてお出になつた頃のことである。或日、花園にお出ましになると、一羽の鳥が蟲を啄んでをるのを御覽になりました。鳥に啄まれてをる蟲が苦しげな相をしてをるのを御覽になつて、堪へられぬやうな悲しみに襲はれたのでありました。悉達太子は、そのまま宮殿におはいりになり、二日も三日もそのことばかりを靜に考へてお出になつたといふことであります。

私がまだ七八歳の頃であつた。庭に遊んでをると、一匹の蛇が蛙の尻をくはへてをり、蛙が悲鳴をあげて鳴いてをるのを見ました。そのときに、私は、竹をもつて蛇を打ち、蛙を逃がしてやつたことがあります。それからあとになつて、これと同じことを見ました。しかし、そのをりには、蛇を打つ氣になれませんでした。蛇が蛙を食うてをるのは、私たちが鶏肉や牛肉をたべてをると同じことなのである。食はれてをる蛙はかはいさうであるに違ひはない。だからというて、それを食うてをる蛇を打つことは、ちやうど私たちが御馳走をたべてをるときに、その頭を打たれるやうなことで、やはり蛇に對しては殘酷な所業となるのであります。さう考へると、早計に蛙がかはいさうだというて、蛇を打つことが出来なくなつたのであります。

悉達太子が鳥の蟲を啄むのを見て、簡単に鳥を逐ふこともせず、それを全體として靜に考へ、そこに世相の眞實をお味ひになつたことは、尊いお心持のやうに思はれます。

二。

この頃、知人の家の二三にいろいろの争が起きてをります。從來の關係上、その争の始末を聞かずにをるわけにゆかぬやうになつてをるので、をりをりは耳にするのであります。また、他人からそれについての私の思惑をも聞かれるので、どちらが曲であり、どちらが直であるといふことを判断せねばならぬやうな場合に出合ふのであります。しかし、靜に考へれば考へるほど、私にはその争うてをる双方に對し

て簡單に是非曲直の判断を與へることが出来ないのではありません。單に、今起つてを一つの問題に於いてだけ考へるならば、甲は是であり乙は非であると断定することも出来るかも知れない。しかし、その今の事件は決して事件の起つたときに起つたのではなくして、起らねばならぬわけがあつて起つたものであるに違ひない。すると、一つの事件を判断するには、それ以前のその事件を起した原因にまでさかのぼつて考へねばならなくなつて来る。たとへば、甲が乙から金を借りて返さぬとする。乙はこれを返せといふ。この争においては、乙は是であつて、甲は非であることは明瞭である。しかし、この事件を、も一歩さかのぼつて甲はどうして乙に金を借りたか、乙はどんなあんばいで金を貸すやうになつたかといふことを考へ、また、その事件の、も一

つ前のわけをも考に入れてゆくやうにすると、あながちに甲ばかりが悪いといふやうに断定することが出来ないやうになつてまゐります。ですから、こんな争の中にはいるときには、どちらの言ひ分もそれぞれ尤なやうに思はれて來るのであります。

すべて、争は一方が明かな人であれば起りやうのないものであります。提婆達多は、釋尊に對して敵對行爲をしたが、釋尊は、決して提婆に對して敵對行爲はせられなかつた。だから、釋尊と提婆との間に争論はなかつた。釋尊は、常に自分に反抗する提婆の相を御覽になつて、早計に彼を咎めることはせられなかつた。或時には、手ひどい呵責の言葉をお發しになることもあるが、衷心には彼の心持を容して提婆達多も成佛すると印可し、自分は提婆達多から多大の導きを受けて

をるとさへ申し立てをられます。

三。

争うてをる兩者の言ひ分を聞けば、どちらにも尤のやうに思はれる。今日では、地主對小作人・資本家對労働者といふやうに階級闘争があちこちに起つてをります。これらの争議の有様を靜に考へて見ますと、簡單にどちらかの味方になつてしまふことが出来なくなつてまゐります。争うてをる双方に相應な道理があるやうに思はれます。蛇が蛙をたべてをるといふ事件の上にも、あながちに蛇ばかりが亂暴をしてをるといふことが出来ないやうな氣がします。蛇に食はれてをる蛙はかはいさうであるが、だからというて、それを食うてをる蛇が悪いとい

ふやうに簡單にしまひはつけられないやうに思ひます。

こんな具合に考へますと、争の起きてをる場合に、どちらが是であり、どちらが非であると審判するよりも、自分のうちに兩方の言ひ分を味ひ、かく争はねばならないわけをも味うて、人生の淺ましさに涙をしぼるより外に仕様がないうやうに思ひます。そして、その争をどちらかに決定することよりも、決定せられない痛ましい世相を越ゆる思にならずにはをられないやうな氣がします。

甲と乙とが争うてをる場合に、私は、甲にも同情が出来、乙にも同情が出来。ですから、どちらを倒してどちらを起すといふことに力を入れることが出来ませぬ。ただ、かかる戦場に争うてをるのを痛ましく感じてその線から先づ自らを超出して彼等双方にも、どちらが勝

つた負けたといふではなしに、互に自分の上にはかり是を認めないで、他人の上にも是を味ふやうにして、その争の一線を超出するやうにしてほしいといふ相談をするより外はないやうであります。

二人の女が一人の男を愛して女同志に争があるとする。その両方共それぞれの理由があつて、自分に是を認め他人に非を認めるのもあらうが、静に考へてみると、その位置を換へれば同じやうなことになることに氣づきます。一人の男を二人が専有しようとするれば、そこに闘争が起らねばなりません。かかる場合に両方の女の悩みも望みも決して無理だとは思はれませぬ。だが、どちらが是であり、どちらが非であると簡単に結末は付けられませぬ。ただ、さうした問題にふれるときに、世相のかかる痛ましさを感じて静に涙ぐんでをるのであります。

す。そして、自分は、その一方に傾かずしてその両方の線から超出せぬにはをられないのであります。その超出によつて、争うてをる二人の心にも、争を超えるやうな心の萌すのを念ずるより外はないのであります。

四。

争うてをる双方が自分でない場合はさうとしても、争の一方が自分であるときにはどうだかと考へてみます。たとへば、私と他の人と金銭上の問題が起つたとします。私は、四五年前から書籍の自費出版をやつてをるので、書籍代の上において、時々先方が金を拂つたといふのにこちらの帳簿に記してないといふやうな場合が出てまいります。

こんな場合に、一應は、こちらのことをいうて再調査を頼んでやりま
す。そのとき、先方が再調査した上にやはりその請求どほりであると
すると、私は先方の言ひ分に従ふやうにしてをります。もし、先方が
無理なことをするとしても、その無理な人を一度信じて交際したのだ
から、やはり、それは自分で自分のしたことと思はねばなりません。
すれば、さうしたこと久しく頭腦を費してをることが、あまりに愚
かなやうな気がします。それで、先方の求むるものは、與へられるだ
けは與へて争を超越したいやうな気がします。では、お前の大切な持
物とか生命とかを與へよというて來るものがあるならば、お前はそれ
を與へるか、と反省してみます。私は、一應はその請求に反省を求め
るでありませう。しかし、それに對して争ふやうな氣持になられませ

ぬ。生命を奪ふとするものがあるならば、逃げられる場合ならば逃げ
もしませうが、それがために争ふだらうか、疑問であります。場合に
よつて争ふかも知れませぬが、今、靜に考へてみますと、争ふことを
敢てしないやうな氣がします。

五。

釋尊の『本生譚』に一つの物語があります。或日、釋尊が花園にお出
になると、そこへ一羽の鳩が飛んで來ました。そして、釋尊の懷には
いました。どうしたのだとお尋ねになると、今、鷹に逐はれて逃げ
て來たのであるから、どうぞ一命を助けて下さい、といひます。やが
て、眼をいからした一羽の鷹が飛んでまわりました、今ここへ鳩が來

なかつたかといひます。釋尊は、今來て私の懷の中にをると申されました。鷹は、その鳩は私の餌食でありますから、どうぞ早く出して下さい、私は飢ゑてをるのであります、といひます。釋尊は、かはいさうだから許してやれないかと申されますと、自分の飢にはかへられぬと鷹は申します。では、その代りの肉をあげたらよからうと申されますと、鷹はそれでよいといひます。では、私の肉を代りにあげようといはれて、先づ初に自分の腎肉を截りて鳩と目方を比べてみました。それだけでは肉が足りないので、だんだんと腕の肉までも截られました。でも、まだ鳩ほどの目方にならない。最後に全身を目方にかけて與へようとせられました。すると、鷹は直に相をかへて帝釋天となりました。さうして、釋尊の尊いお心を讚嘆したといふことであります。

この『本生譚』は釋尊の生活氣分を語つてをるものであらうと思ひます。私は、自分に反省してみると、こんなにするまでになつてをらぬやうな氣がします。自分の懷に來た一羽の鳩のために、自分の全身をも與へるといふやうになれるかどうか疑はしいと思ひます。しかし、場合によつては、自分の懷に投じて來るものを庇ふがために全身をもつてその人を蓋ふやうなことをやらぬにも限らぬと思ひます。やれさうな氣がします。それは、鳩なら鳩のためといふやうな心持のときは出來ませぬが、鳩やら自分やら忘れた場合に鳩の命を助けるために、自分の全身を敵の前に投げることもあるかも知れないと思ひます。

この心持は、やはり敵に負ける心持ではなくて、敵を持たない心持なのであります。争を超出する心持なのであります。

いつか誰かに聞いた話ですが、西洋人は自分の権利を主張することが強いが、東洋人は直ぐに権利を抛棄する傾向があるといふことです。どちらも面白いやうに思ひます。権利を主張するのよい。しかし、権利を主張するために、他の権利の主張と衝突して闘争を起すやうな場合には、権利を抛棄して闘争を超出するといふ気分も面白く思ひます。それは、形の上では権利の抛棄であるけれど、その心持においては、抛棄ではなくして超出であります。

戦ふことは必ずしも悪いやうにも私は思つてをりませぬ。しかし、戦つてをるうちに、何を戦ひ争つてをるのであるかといふことを考へてみると、さうした争に自分を使うてをるには、あまりに自分が尊いやうな気がします。高が金のことではないか、高が肉體のことではな

いか、高が虚名のことではないか、こんなものがどうなつたにしろよいぢやないか。我には、これらよりも、もつと尊いものがあるではないか、大切なものがあるではないか、といふやうなことを思つて來ると、一應は、差別の上で自分の権利を主張もしてみますが、どうしても、さうしたことに自分を投じてゆくには、あまりに自分の尊さを思はずにはをられませぬ。さうしたことに費してゆくには、あまりに惜しい自分だと思ひます、かくて、私は、権利を超えて、闘争の上に立つやうな心になります。形式の上には負けたことにもなりませう。しかし、私は、負けたといふ考でもありません、與へたといふ考でもありません。私が、私の大切なものを大切にしていふだけなことであります。

吾々の世界に起つて來る大抵の争は、みな物欲のことであります、財産・生命・名譽、これらは大切なものである場合もあります。しかし、場合によつては、これらにかかはつてをることの出来ない私があります。その私は、闘争に出會すときに、その線に立つほどの賤しい自分でないことを思ひ、すべての物欲を去つて自分自身に歩み出るやうな氣持で闘争を超出するのであります。

一つの闘争を徹底的につづけてゆく態度の人があります。これにも面白い相をみます。ただ、かうすることによつて、最後に、彼が眞實の尊い自分にふれるであらうといふ希望の下に、彼の眞劍の闘争に、或價値をおくわけであります。しかし、さうした闘争をつづけないうちに、直に財産や生命やにかかはつてをられない尊い自分に眼覺めて

闘争に超出するやうであつたら、なほさら結構だと思ひます。

親鸞聖人が「もろもろの諍論のところには煩惱起る、智者はこれを厭離すべし。」と申されたことを思ひ出します。また、親鸞聖人が法然上人の門下にお出になつた頃、法然上人のお使として關白兼實公のところへお出になりました。すると、座にゐた當時の高僧たちが、いろいろに論議問答をしかけられました。聖人は、これに答へずして、黙つて涙ぐみつつ暇乞をしてお出になつた。法然上人は、あとに、この態度をほめた手紙を書いてお出になります。それが「興の御書」として残つてをります。釋尊の弟子たちの態度をみましても、いつもかうした態度に出てをられるやうな氣がします。釋尊は、常に、かうした態度をよしよしと印可してをられましたことがお經にみえてをりま

す。財産や生命のことでなくて、尊い法の上のことでも、それに腰を据ゑて諍論をすることは、やはり尊い自分を傷けることになります。それで、智者はこれを厭離するといふ釋尊自身のお言葉が『大寶積經』の中や『法句經』の中に記されてあります。理窟の上から論じつめてゆけば、トルストイが『イワンの馬鹿』に書いたやうな無抵抗主義は無理なやうな氣もしますが、理窟なしに靜な自分に眼覺めてみると、無抵抗主義の無抵抗ではなくて、自然にすべてにオールライトの心持が味はれるやうになるやうであります。

六。

藤岡了空師が、かつて、骸骨の畫を書いて、その上に「裁判に勝つ

て十日もまだたたず。」といふ句を題して私に送られたことがあります。これは鬭争をし裁判に勝つて間もなく死んだといふことで、勝利の悲哀をここに述べたものだと味はれます。人間が反省的でない無自覺な間は、鬭争に勝つたというて勝利に酔うてをられるかも知れませぬが、眼が明るく開いて來ますと、勝つた自分も見えるやうに負けた敵も見えてまゐります。かくて、勝利の快感よりも勝利の悲哀を味はずにはをられなくなつてまゐります。勝負に勝つたというて、負けたものを單に輕蔑してをられるやうな人ならば、勝利の快感に酔うてをられることも出來ようが、負けたものの悲しみを自分の上に味ふやうになつてまゐりますと勝つたことの上に悲哀を味はずにはをられなくなつてまゐります。だから、鬭争は勝つても負けてもいやなもので

あります。さうしてをることによつて、尊い自分を削り減らしてゆくことに氣づいてまゐりますと、假に持つてをる財産や生命や學問の結着などはどうでもよいやうに思はれて來るのであります。そんなにはしいならば何でも取つてお出なさいといふやうに、一線を超出するやうになるのであります。さうして、その超出した地位から争うてをる人たちの心持を照して、彼等自身もその明るみに出るやうに念願するのであります。「法句經」には「争は争によつて盡きることなく、争は愛によつて盡くるものである。」と記してあります。かうした教訓も、單に外的な教訓として味ふならば、何だか窮屈なやうな氣もしますが、實際に靜な心になつてみると、すべての鬭争の上にかうした教訓を見出さずにはをられないやうになつてまゐります。自分の胸に承知の出

來ぬことがあれば、よい加減にそれを抑へておくことはよくない、だから、承知の出來るまで徹底的に争うてみるもよい。しかし、その争は、争ふためのものでは決してない。その争によつて、眞實の自分を見出すやうにならねばなりません。つまり、金のことに全力をもつて争うてをるものは、金よりも尊い自分のあることを知らぬ人でありま

す。名譽のために或は外聞のために或は道德のために争うてをる人は、それらより以上にもつと尊い自分の存在に氣のつかぬ人であります。

私は、他人同志の争を見て自分と他人との争に思ひいたり、その鬭争にまかしておかれない尊い自分を發見し、靜にその自分の成長に精進しつつ、争ふ人たちの上を涙をもつて見ることの出來る自分の幸福を思ひ、かかる心を開發せしめていただいた釋尊はじめ多くの智識た

ちに感謝の念を禁じ得ないのであります。(大正一五・二・二三)

二九。諸佛讚歎の願をしのびつつ

批評といふことが、大切なこととせられて来た、客観的態度といふことが重要視せられて来た、平等といふことが高唱せられて来た。さうした今日は、あまりに人と人との間に温まりのないやうになつた氣がする。私が頑なで若い人たちの心に打ちとけられないためであるかも知れないけれど、今の若い人たちが、あまりにがさがさしてしんみりした潤ひのある氣持が少いやうな氣がしてならぬ。あまりに功利的で打算的なやうに見えるのは、私のひがんだ眼で見たせいであらうか。それならばうれしい。とにかく、今の私は、あまりにとげとげしい言

葉を聞くのはいやになつた。深刻な批評とやらも聞きづらい気がする。冷酷な皮肉もいやである。

私は、ゆたかな雰圍氣のうちに住みたい、温かい空氣のうちにくらしたい。人と人とが互のあらを見つてあつて落ちつかない批評をしあふよりも、互のよいところを見出して互に讃仰しあふやうな生活が望ましい。

かうした私には、法藏菩薩が四十八願のうちの第十七願において、「たとひ、我佛を得たらんに、十方無量の諸佛、我が名を咨嗟し、稱せずんば正覺を取らじ。」と申された心持をなつかしう思ふ。十方の諸佛から我が名を稱譽せられたいといふ願は、率直な純眞な願だと思ふ。尊い人たちからほめられたい、信ずる人たちからほめられたい『無量

壽經』の下巻に釋尊が阿彌陀佛のことを語つて、「十方恆沙の諸佛が無量壽佛の威神功德の不可思議なるを稱歎し給ふ。」と語つてお出になる。我が名をほめられたいと願うた阿彌陀佛は、十方の諸佛からほめたたへられる身になられた。諸佛稱讚のうちに住ませられる阿彌陀佛のゆたかな心持が仰がるるのである。

私は、やはり稱讚の中にをりたい。痛罵の中や非難の中に住むことは好ましくない。とげとげした周圍の中に住むのはつらい。どちらへ行くかと選ぶならば、私はやはりほめてくれる人の側によりたい。ほめる人の前には、純眞な自分であらるるが、そしる人の前に出ると何とはなしに、自分に肩怒らすやうな氣がする。

先日、福岡縣の三池に行つたをりに、會員の人たちが、みんな互に

ほめあつてをられる相をみて、非常になつかしい氣がした。阿諛とか
諂佞とかいふやうな稱讚はいやであるけれど、心から信じ合ひ愛し合
つて互にほめあつてをる青年たちの相をみて、私はほろつとさせられ
ました。稱讚の世界は美はしいものだなと思つた。そして、第十七願
の心を思ひ出した。

先年、東北を巡回したをりに、青森で一席の法話をした。そのをり
に私を紹介した人が、勿體ないほどに私を稱譽して聴衆の人たちに紹
介した。私が會場に出ると、集つてゐた人たちが一同に合掌し稱名し
て私を拜むのである。私の心は何ともいへない緊張を感じた、そして、
最も謙虚な氣持になることが出來た。それで、語つたことは、最もお
となしいすなほなものであつた。一しよに來てゐた江崎君が今度の旅

行中に今日ほどすなほなお話を聞いたことはなかつたというた。ほん
たうにさうだつた。何の衒ひ氣もなく何の頑張もなく最も純眞に私自
身が語られたやうな氣がした。私は、稱讚により純眞な人たちの渴仰
によつて純眞な私に引入られたやうな氣がした。

稱讚されると調子に乗るといふやうなこともある。しかし、これは、
しつくり心の落ちつかぬ場合である。稱讚がその人の眞情から溢れて、
その場の空氣がそそとして自分に迫り來るときに驕慢になるといふ餘
地はない、最も謙虚な態度になるものである。それは、謙遜とかいふ
やうなものとは違ふ、恐縮といふやうなものとも違ふ。もつと、しつ
とりとした引き緊つた感じである。

この頃、或雑誌を見たら、子供を育てるには、その子の悪いところ

を指摘するよりも、よいところをほめたらよく育つ、上手だ上手だといふとその子は自然に上手になるといふやうなことが書いてあつた。これは、ほめるものがほめられるものを感化する相である。

ほめるものも功德を得、ほめられるものも功德を得るのが、稱讚の徳である。相對してほめあひ、別れてほめあふといふことは、美しい氣持である。尤も、他に或目的があつてほめるやうなのはいやなことである。かうしたことは論外である。ほんたうの尊敬の心から互にほめあふ、ほめずにはをられずして互にほめあふ間柄はまことに美しいものである。譏りあつたり、くさしあつたりするやうな境地に深刻味を味うたこともある。しかし、今日の私は、さうした深刻味よりも甘い稱讚の世界がほしい。大體、私は甘い男だと評せられることがある。

實際甘い男らしい。甘いことが好きである。心からの稱讚の中にのたいてい。心から稱讚する人の前に出ると、私の心が引き緊つて来る、純眞になつて来る、率直になつて来る、しつとりと抱き合ふ心もその間に生れて来る。罵詈や讒謗の中に立つたときの私の氣分には、どうしてもいやなものがついてをる。力味や頑張やがついてをる。それに反して、心からの稱讚の中にをるときは、心がゆつたりとして、自他を混亡したやうな廣やかな心持を味ふことが出来る。

『阿彌陀經』を讀むと、六方の諸佛が三千大千世界を覆ふやうな廣い舌をもつて阿彌陀佛を稱讚し給ふといふやうなことが記されてある。かうした稱讚の中に住まる阿彌陀佛の心が思ひやられる。そして、私自身もどうかかうした境地を得たいと念願してやまない。

ほめられるものは、ほめるものでなくてはならぬ。私は、ほめられる心よりは、ほめる心に先づ進まねばならぬ。私の心が純真に人を稱譽するやうになれたら、そのとき自然に私自身もまた稱譽の中に住むことが出来るに違ひないと思ふ。

常に共に讚嘆する社會、私はさうした社會に生きて行きたい、さうした國に生れたい。今更のやうに第十七願の心が切にしのばれる。

(大正一五・三・二二)

三〇。人からうしろ指をさされるやうなものになるな

一。

まだ小學校に通うてをる時分に、母から、をりをり、「人からうしろ指をさされるやうなものになるな。」といふことを聞かされたのを、五十歳になつた今やうやく了解が出来たやうな氣がしてゐます。人には、前を見ることの出来る眼はあるけれど、うしろを見ることの出来る眼はないのであります。だから、他人がうしろから指さしをしてをるかをらないかといふことは、本人が知ることの出来ることなのである。

では、人からうしろ指をさされてをるかをらないかといふことが明か
にならぬことになります。ところが、人からうしろ指をさされてをる
ことが分るといふのは、自分自らにやましいことをやつてをるからで
あります。それで、人からうしろ指をさされるやうなことをするとい
ふことは、自分自らに安んぜざることをするといふことになるのであ
ります。母が、人からうしろ指をさされるやうなものになるなといは
れたことは、自ら安んぜざるやうなことをやるやうなものになるなと
教へてくれたものと了解してをるのであります。自らに安んずること
の出来ないやうなら耻かしいことをやつてをるときには、何だか自
分のうしろから人が指ざして嘲つてをるやうな氣がするものでありま
す。一向物を考へずしてすんでゆく人は取りのけとして、少し物を考

へる人ならば、自分でやましいことをやつてをる際には、人が何ぞい
ひはしないだらうかといふ虞と危ぶみとが自然に心を襲うて來るもの
であります。さうした心を味ひながら生活してをる人が所謂うしろ指
をさされるものなのであります。

二。

「天のなせる禍は、もつて生くべし。自らなせる禍は、もつて生くべ
からず。」と古い支那人はいつてをる。人にそしられようかと思ふ心は、
自らにやましいところのあるときに起る心なのであります。こんなこ
とをすれば人がそしるであらうかと考へる、そのそしる人は、考へて
をるその人の外にはないのであります。だから、人にそしられようか

と考へついたときに、そしるものはそしれど、その考をざつぱりに片づけてゆくのは、自分の生活を粗末に取扱ふことであると思ひます。もしらばそしれど打ちすてる前に、そしる心持を充分に味うて、もし、人が皮相的に考へればそしるであらうけれど、自分の衷心を分つてくれたら決してそしることはないといふほどに、自らの奥に信ずるところがある場合には、もしらばそしれ今に分るであらうといふ氣持になつて、自分の志すところに精進するのは正しいことだと思ひます。この場合には、もし、人がうしろ指をさしてゐても、そのさしてをる人が、やがて先非を悔いてその罪を謝するにいたるであらうといふ確信があるからして、うしろ指でも何でもさして見よといふ位の力ある精進が出来るわけであります。しかし、この衷心に信ずるところがなく

して、自分の衷心にもそしる心はつきりしてをるのに、それを無視して見ぬやうにし、なかにそしるならそしれど世評を愚にして進んでゆくのは、暴虎馮河のやうな勇氣であつて亂暴といはねばなりません。かうした生活には、根本的に無理があるから、どこまでも安らかな思はなく、常に見すかされてをるやうな氣がするものであります。だから、常に反抗と反動と自己辯護の煩雜な心から、抜け出ることが出来ないであります。母が、「人からうしろ指をさされるやうなものになるな。」と教へてくれたことは、かうしたうしろめいた心の生活をするものになるなと教へてくれたものであると思ひます。

自分で自分のやつてをることには不明な點があり、危なかしい思のするときに、誰かが横から見すかしてをるやうな心がするのであります。ですから、私たちは常に内に省みて、自分の衷心にやましいやうなことをしないやうに心がけたいと思ひます。自分の生活に陰影を有するのは、自分の衷心に黒點を有するからであります。自分の心の中に暗い一點を存するときには、自分の周囲には、大きな陰影を現はすやうになるのであります。だから、人からうしろ指をさされるやうなものになるなといふことは、常に清明な心になつて何物にも恐れないうやうな生活をするをいうたものであると思ひます。

客觀の事象に威壓せられて機械的に生活する人が、何事にも世間の評判といふことばかりを氣にして、人の色顔ばかり見て生活してをる

のは、いたつて氣の毒なことである。かうした人に對しては、評判などどうでもよいそしるならそしれど、思ひきつて自己の道に精進すればよいではないかと語らずにはをられない。しかし、かう語ることは、徒に主觀にのみ閉ぢ籠り、内容のない主觀の殻を固執して我見を押し通して行かうといふやうな考から、世評などはどうでもよいと世間を愚にしてかかるのは面白くないことと思ひます。世間を愚にして行くことは、やがては、自らを愚にして行くことになります。こんな人は、無理に人々は何とでもいうてをれと頑張つて無頓着を装うて生活してゐることがあるとしても、決して落ちついた安らかさをもつた生活を營むことは出来ないものであります。人の評判といふことも一應は自分の内容として取り容れて考へる必要がある。さうした上に、これを

超ゆべきであるならば、超えて行くところに強い力が湧き出るのではありません。

四。

蓮如上人が、「人が極樂へ行つてをるかゝないかを確かめるためには、その人の近隣に住んでをる人に問ふのが一番よい。」と語つてをられます。近隣の評判は人を地獄にも極樂にもやることになるたらうと私は考へます。近隣の評判がその人の内容となつてをる場合があります。他人の評判を一時は自分の内容に取り容れて考へることが大切であります。そして、そこに自己に對する自分自らの批判をし、その批判によつて自分が間違つてをるといふことが分つたら斷然廻心懺悔するが

よい。しかし、また、その批評が自分の心を了解してゐないからであつて、もし、了解するやうになつたら稱讚するに違ひないといふほどの自信があるならば斷乎として初志を通して行くことがよいと思ひます。かうすることは、決して人からうしろ指をさされることではないのであります。

五。

阿彌陀佛が十方の諸佛にほめられたといふ願を建ててお出になるのは、やがて人からうしろ指をさされるやうなものになりたくないといふ願ではあるまいか。人からほめられるやうになりたい、この願は率直な尊い願であると味はれます。深い内省によつて純一な自己にふ

れて生活するときには、すべての人たちが稱讚してくれるといふ氣持を味ふやうになります。親鸞聖人が「信心の行者には天神地祇も敬伏し」と申されたのはここであります。釋尊が御誕生になると、梵天だとか帝釋天だとかいふ神々たちが歸敬したといふことには深い味ひがあると思ひます。自らに明るい心を得て生活するものは、常に人々と神々との稱讚の中を行くやうな心持がするのであります。稀に實證的世界に自己に對する非難の聲を聞くことがあつても、それは自分の聞きそこなひであるか、或は又そしるものの誤解であるに違ひないと誹謗の聲のうちにも稱讚の響きを聞くのであります。それで心の清明なものは、常に人々と神々との稱讚のうちに歩むのであります。十方の佛たちが稱讚し證誠護念せらるる中を靜に力強い精進をするのであ

ります。幼年の頃に、母が一人からうしろ指をさされるやうなものになるな。」と申されたことは、阿彌陀佛のやうに、至心信樂の心をもつて勇猛精進な生活をし、主觀の安立のうちに全世界の衆生の稱讚を信知する確かな生活をするものになれと教へて下さつたものであることを、この頃味ふことが出來て、今更のやうに母の懇篤なる教訓を悦んでをるのであります。(大正一五・四・八)

三二。京の一夜

女の一番美しい顔は泣顔である。女が泣顔さへ見せたらどんな男もまわつてしまふ。それは女の先天的本能である。何の自覚もせず、どんな女もできるから、自然の配剤は妙である。これを人工的に利用するのが遊女の涙である、これには眞の力はない。本人の自覚せない本能で泣くところに力があるのである。

東京の郊外に住む人のいふことを聞くに、野菜が安くて仕事にはならないといふ。その代りに花の價が非常に高い。野菜より花が高いと

いふことは食ふに困らぬ人が多い反照のやうな氣がする。東京にゐる人が生活問題に困るなどといふが、それは至極少數の人であるらしい。

或人が夕飯を食はずといつて料理屋へつれて行く、食ひ切れぬほど御馳走をならべ藝者を二三人も侍らした。話がだんだん進んで御馳走した人がしきりに生活問題に困るといひ出したが、そんなことをいふ男は所謂實業家である。よばるるものは無一物の風來人で、よぶものは物持、物持は人に馳走するに藝者など呼んでさうして困つてゐる。風來の客がいつた。私が食ひたくもない御馳走をならべられ、望みもしない藝者を侍らして人に御馳走するやうに金を使ふから生活に困るのでせう、私等は來客があつても後腹の病むやうな御馳走はせぬ、だ

から生活問題に困るなどといふことはない、あなたもちと考へて見たらよいでせうと。御馳走した人はわざわざ御馳走しながら、よばれた人から小言をいはれては割の合はぬ話であつた。

武者小路氏と志賀直哉氏とをどう思ふかと尋ねられた。二人共私は會うたことはないが、その作物によつて正直なよい方たちだと思つてをります。近來は小説を多くよまぬから知らないが、私の二人に對する感じは尊敬すべき人格者だといふことであります。二人の違ひめをどう感ずるかといへば、武者小路氏には坊ちやん風なあどけない所があり、志賀氏には靜かなおとなしい所がある。武者小路氏が音を立てて流るる水であるならば、志賀氏は音なく深くしみこむ水のやうな人

だ、志賀氏には深さが濃く出てゐるやうな氣がする。

人物評は面白いものだがむづかしいものだ。誰を見ても感心することの少かつた自分は、この頃になつて追々誰を見ても感心できるやうな風になつて來た。皆が偉いやうな氣がする。

金持は苦しみのないやうに思ふ人もあるやうだが、金持は金持相應な苦しみを持つてをる。食へぬものは食へるやうになると又ほかのなやみを持ち込んでくる。食へぬ悩みは食へた時になくなるが、食うた以上に出る複雑な悩みはその解決がなかなかむづかしい。貧乏人の悩みよりは金持とか貴族とかいふ人の悩みは複雑なだけに、餘計に血を

絞る思ひがする。それは彼等自身の當然受くべき刑罰であるかも知れない。

神様が人間をつつたとすれば、人間に食氣と色氣とを與へたのは大失敗だ。この二つがあるために面倒なことばかり起るのだもの。この二つが面白い間は、先づ暫くの間、僅ばかりの時間の樂しみのために多くの人が營々するからをかしい。

看板を立派にして内容の貧弱なのよりは、看板は少し辛抱しても内容の充實せる方が丈夫な生活振のやうな氣がする。兩方立派なのは勿論よいが……。『中外』も裏へかがんで輪轉機を買ふか輪轉機を買はず

に門戸を張るかの問題にぶつかつてゐるさうだ。それは輪轉機を買うて門戸を張らぬ方がよい。中外の讀者は門を見て新聞を買ふのではなく新聞を見て新聞を買ふのだから、發行能力さへ上ればどんな裏へかがんでもよい。新聞をやつて行くのに輪轉機と電話とさへあれば、どんな裏屋にゐても差支ない。東京に堂々と新聞廣告をして出版をしてゐる者に立派な家にゐるのは極少數である。何々閣・何々社といへば堂々たるやうに聞えるが、みんな一冊の本の新聞廣告料で買へさうな小さな家にをる。その間が却つてよい本が出るやうな氣がする。

『歐洲文明と人類の將來』といふ本を讀んで見た。露西亞のトルベツコイの著書である。勿論譯書で讀んだのだ。歐羅巴の文明は自我中心

の文明である、それに感染するものをその奴隷とせねば止まぬものである、露西亞もその奴隷となつた、日本もその道を歩んでゐるといつてをる。なんでもかでもアメリカ式にならねば承知の出来ぬ人やマルクスのでなければ承知の出来ぬ人達はこの書物を読んで見るとよいと思ふ。とにかくよい本が翻譯されたと思つてをる。

貧乏人になるのは貧乏人になるやうな人になるのだ。失業者は失業すべき筈の人がしてゐるのだ。貧乏人を見ると成程と思ひ、失業者を見るとこの人が失業するのは尤もだと思ふ。

アメリカナイズされるかロシアナイズされるか、どちらにしてもろ

くなことはない。金持が天下を取らうが労働者が天下を取らうが吾等にはどちらでもよい。どちらにしたつて大した幸福でもなく不幸でもない。

東京へ行つてきて京の町へくると如何にも静かだ。都會もこの位の程度だとまだよい。あまりいやでもない。都會に住む人間は電車の響だけででも確かに十年は生命を縮めるだらうと思ふ。

電車や自動車のない田舎が一番心がのんびりする。近代文明は便利ばかり考へて人間を機械的にしてしまふ。人間らしく生きたいと思へば田舎に行くに限る。電車のない國、自動車の來ぬ國、ランプも電氣

もない焚火で燈明をとるやうな所が一番人間味があるやうに考へらるるやうになつた。

野蠻人とそしらるる人の方が却つて神に近い。文明人ほど人間に遠かつてしまふ。文明になるといふことは機械になるといふことのやうに思ふ、いやなことだ。

ラスキンが汽車をいやがつたといふことだ。汽車がいやな人でなくては人間を語るに足りないと思ふ。電車や自動車を謳歌してゐる人達は精一杯思ひ切つたところが政治家となる位が關の山だらう。

學校も何々大學といふ時代は既に去つて個人中心の私學が起るべき時が迫つてをる。本當に人間を磨かうとするには、今の大學はその組織からして駄目だと思ふ。今の學校は人間を機械に養成する所であるやうである、いはば恐ろしい所だ。人間が人間となることを學ぶ人はないだらうか。

今の學生達の多くは卒業して機械になることを念願してゐるのではないか。機械にならなければ生きてをれないとなると淺ましいことではないか。人間として生きようとする氣概のある人が出ればよいと思ふ。

歴史を見ると何處の國の何時の時代でも人の上に立つて人を支配することの好きな人達がをるものだ。さういふ人を政治家といふ。政治などは誰がどうやつても大衆には關係がない。大衆はあまり絞られない方が便利だといふだけのことだ。

帝國議會といふものはただ金の出入をやかましくいふだけのものだ。何でも金に換算すると馬鹿々々しくなるたちの人にはあまり重要な場所ぢやない。こんなたちの男は十何年東京にゐても帝國議會の在り場さへ見ようとはせなかつたものだ。

あまり親しい人が相次いで死ぬので初の中は胸がどきんどきんとし

だが、この頃になるとうまいことをやつたなと思ふやうになつた。さうしてこの世よりはあの世の方が懐しいやうな氣がするやうになつて來た。かういふやうな心持になつてだんだん死んで行くと、死際が大變樂なやうだ。

この頃何をいうてもはつきりいひ切れないので、「まあこんな氣がする。位に柔かに物をいふやうになつた。さういはねば氣がすまぬやうになつた。なんといつてもその反對がいはれるやうな氣がするから仕方がない。ここが老人になつた證據かも知れぬ。これもかういふ氣がするといふやうな氣がする。

枇杷の葉に經文を書いて撫でると、どんな病氣も癒るといふので、東京・大阪の俳優が静岡まで出て來るといふことを只今承つた。それは癒らぬこともあるまいと思ふ。何でも信じさへすればききめがある。ところが少し學問でもすると、何でも信じなくなるから面倒になる。鯛の頭でも信じさへすれば功德はある。信じられるものはどんなものであつたつて差支はないのだ。若し世の中に神があるとすればそれは信ずる人の心がそれなんだ。

女は男を信じて見なさい、屹度その男は自分のものになります。男も女を信じて見なさい、屹度その女は自分のものになる。「信は道の母」と『華嚴經』にいうてあるが、信はまた戀の母でもある。人に惚れられ

ることのない人間は信心のない人間だと思つて差支ない。釋迦などは大衆に惚れ抜いた人のやうな氣がする。

東京に行くつと、學者でも實業家でも皆が行き詰つた行き詰つたといつてをる。行き詰るやうなことを考へて行き詰つてゐるやうな姿だ。各宗の本山が僧位を賣買して行き詰るのと同じ行き詰りだ。せつは行き詰つた方がよい、その中からよいものが出て來るかも知れぬ。行き詰るとか行き詰らぬとかは考へ方によるのである。僅ばかりの借金で行き詰つたやうに考へる日もあるし、多くの借金があつても一向行き詰らぬ氣である日もある。行き詰るやうに考へる時はとうに行き詰る。行き詰らぬやうに考へると何時でも行き詰らずにすむのだ。石川舜台

老人が「本願寺が借金で行き詰るといふのはをかしい、借金は首もとらぬ、行き詰るといふから行き詰るのだ。」といったといふ。これは二十四五年前の話である。私は今でもこれを折々思ひ出す。人間は何時も自分の入る穴を掘つてをるのだ。行き詰るといふ穴を掘ると、そこへ入る。行き詰らぬといふ「蓋」をとると廣い世界がそこから出て來るのだ。

困つた困つたといふと、そばにをるものも困つた困つたといふやうになる。そして又そばにをる或者は困らしてやらうといふやうなことになる。自ら困るが人またこれを困らす。自ら困る境地を脱却すると困らさうとしたものが困つて逃げて行く。

エヒクテタスがドア・イズ・オープン(戸は開かれる)といったことを私は何時も考へてゐる。今日不圖「普門」といふことを感じた。「法華經」の普門品!何とよい名だらう。四面開放だ。誰かが人生に袋町はないといったことがある。それが普門の意味だ。久しい間「法華經」の普門品を読みながら、この頃になつて漸く普門の意味を感じるとは自分ながら間拔けた男だとをかしくなる。ドア・イズ・オープンよりは「普門」の方がもつと意味のある語である。普門!普門!何でも困つた時にはこの普門普門を三遍ぐらゐ読んで見給へ、屹度困却の鬼は逃げてしまひます。念彼觀音力、彼の觀音の力を念すれば刀及斷々壞といふ言葉は普門の味ひである。(大正一五・五・一六)

三三二。或養鶏家の言葉

一。

S君は、今年三十になるといふ、五六年前から仕事をやめて、靜に自分の病を養ひ、一人の母上と共に或市の郊外に住んでをるのだ。ささやかなる庵をむすんで野菜やら花やらを作つて楽しんでをる。アメリカに行つてをる兄が二人の生活費を送つて來るといふことである。十年ばかり前から、私は彼と近づきになつてをる。彼は純な心の持主である。この頃、彼に會つたをりに、彼がいろいろのことを聞かしてくれた。いづれもみな尊い言葉であつた。私は、彼の言葉を聞きながら

涙ぐまずにをられなかつた。その話のひとつに、彼が養鶏をして來たことについての實感があつた。それが殊に私の心をひいた。

S君はいうた。この頃母の心に妙な影がさして來た。どうしたものかと考へてみたところ、それは過ぐる二三年ほどの間私が養鶏をしたことから、私の心に暗い影がうつり、それが母の心にも感染したものだといふことがわかりました、私が始めて養鶏をしようと思ひ立つたのは、少しでも金を儲けて兄の負擔を軽くしたいといふ心も勿論あつたのであるが、それよりも多く私の心を養鶏の方にひいたことは、よい玉子を私のやうな病人に供養するといふことであつた、このあたりでは、地玉子というて賣つてはあるが、ほんたうの地玉子の少くて、養鶏する家に行つても、地玉子というてその中に支那玉子を交せてあ

るやうなことが間々あるので、病人などがちよつと困ることがあります、それで、私は新鮮な地玉子を拵へて病人たちに供給したいと思ひ立つたのであります、そして、養鶏をやりかけて二三年になります、今日になつて考へてみますと、養鶏をすることは私自身の徳性の上によくはない影を受けることに氣づいたわけであり、それはかうしたわけであり、鶏は廣いところに出たがり、それを自由に遊ばしては玉子を多く生まないものですから、窮屈なところに彼等を閉ぢ込めておくことにします、このことがやがて私の心に自己の便利のために他人の不自由を忍ぶといふいやな影を印します、それから、牝鶏が玉子を生むと、すぐに本能的にこれを孵化しようとし、所謂だきがついて來ます、彼等の欲するがままに玉子をだかしておいて

は、玉子をとることが出来ないから、この本能的な親心を阻害して玉子をとるので、それから、或玉子を孵化して雛を出すと、今度はまた本能的に牝鶏はこの雛を愛育します、これも、また久しくさうしておくと玉子を生まないから、暫くにして親子を分離せしめるのであります、かうしたことをするために、私共の心のうちに親子の温かい心を阻害する影を印するのであります、それから、また、たくさんの雛が出来ますと、そのうちの牝鶏は大切に育てるが、牡鶏の大部分は肉鳥として目方にかけて賣るので、さうして、久しう玉子を生んだ牝鶏でも年よつて玉子を生まなくなると、それを目掛にして鳥屋へ賣るのです、かうしたことをするとき、私の心に或残酷な影が印せられるやうであります、私はこんなことを二三年やつて來たために、自分

の心をも、また、母の心をも、多く傷けて来たやうな気がします、ですから、もう養鶏をやめてしまはうと思つてをります、と語つたのであります。

この物語を聞いて、私はなるほどと思ひました。私の知人の間に深く物を考へる人が十幾年も前から養鶏をやつてをる、また、他のよく考へる友人も數年前暫く養鶏をやつたことがあるが、私は、未だ曾てS君のやうな感慨を聞いたことがなかつたので、殊にS君の心のデリケートなのに感ぜしめられました。後に、或人にこの話をしたら、その人は、いひました、私は數年前に二三羽の鶏を養ひました、すると、妻が家の中に鶏がをると子供たちの性の教育のためにあまりよくないやうな気がしますからやめて下さいといふたので、やめにしましたと

いひました。また、或養鶏をしてをる人にS君の言葉を話すと、それは、そのとほりであります、さうしないと商賣にならぬのだから、しかたがありません、ですから、養鶏もあまりよい職業ではありません、と申しました。

鶏を養うておいて彼等に餌を與へ、彼等を勞つて育ててをるのを見ると、養鶏してをる人の心のやさしさをも感ずるのであります。しかし、養鶏してそれから利益を得ようとするときには、S君のいふやうにむごたらしいことをやつて、鶏から利益を搾取することになるのであります。他の自由を奪ひ、他の温かい心を傷け、他の命を害うても、頓着なしにただ自分の利益をこれ圖るといふ心によつて養鶏の仕事が出来て行くかと思ふといやな気がします。

S君が養鶏をしての實感的な言葉を聞いて、私は、世の中の所謂搾取階級なる人たちの心を推察することが出来るやうに思ひます。たくさんの人を使用して事業をしてをる人は、いつもこの養鶏家の心をもつてゐなくてはならないのではあるまいか。自分の使用人には彼等の欲するままに自由を與へず、彼等の人情をも生命をも自分の仕事のために犠牲に供せしめることによつて、その仕事を運んで利益を得るやうにしてをるのが所謂搾取階級なるものではあるまいか。會社の重役とか官廳の長とかいふその幕下に多くの人を使用する人々の心にはS君のいふやうな心持がないであらうか。もし、彼等に自覺的にその心

がないにしても奥深くその心が潜んでをるやうに思はれます。S君が養鶏をしてをることによつて自分や母の心が害はれると感じたやうに、或會社の重役とか或官廳の長とかいふ人たちは、彼等の仕事を運んで行くうちに、ともすると自分の徳性に暗い影を受けることに氣づかないでをる人があるのではあるまいか。よほど、眞面目に内省する人でなければ、S君のやうなデリケートな感情をもつことは出来ないであらうと思はれます。S君のやうな話を聞くと、多くの人を使用し、仕事をする營利事業を主宰する人たちの心には、人の自由を奪ひ、人の生命を輕しめ、人の情を蔑にすることを敢てするだけの冷酷性がなくてはならぬのではあるまいか。さうした冷酷性がない場合には、彼の仕事の上より起る利益は或はなくなるかも知れないと思はれま

す。使用人の自由を尊み、生命を重んじ、人情を大切ににするやうにしなければ、或はその仕事が破滅するほどの損害を招くかも知れない、さうすると、S君が養鶏をやめたやうに、多くの人を使用する營利事業をやめねばならぬことになつてまゐります。さうすれば、養鶏する人がなければ、鶏の蕃殖がとまるやうに、營利事業を起す人がなければ、多くの使用人の生活が困難になつて來ることになります。鶏の場合には、人間の場合には、簡單にいやになつたからやめるといふわけにも行くまい。それで、所謂營利事業の重役となつてをる人でも單に搾取的な考ばかりでなく、使用人たちの生活といふことをも考慮して出來るだけの自由を與へて、出來るだけ彼等の情を重んじ生命をも尊むことに心がけてをる人もあるのであらうと

思ふ。岡山縣の倉敷の大原孫三郎氏が労働科學研究所を建てて労働者の健康についていろいろ學者に研究をさしてをるなどは、單な搾取的な考ばかりでなく使用人をよくしたいといふ心の現はれとも見ゆる、しかし、これもまた見方によつては、養鶏家が自分の養うてをる鶏に病氣のないやうに心がける心理であつて、さうすることによつて、一層自分の搾取を便利にする方法であるとも考へられます。

こんなに考へて來るとS君のやうなデリケートな感じをもつてをるものは、今日の社會組織の下にあるやうな所謂大量生産をする工業會社を主宰して行くことが出來ないのであるまいかと私は考へます。私の知人の二三の人たちなどは、大會社を統理しつつ相當にデリケートな感じを失はないことを知つてをる、しかし、この感じをもつてを

る彼等には多くの使用人を役して事業を運んで行くことは相當の苦痛である、私は察せざるを得ませぬ。彼等は一面デリケートなやさしさをもつてをるが、しかし、一面には鶏を拘禁し鶏を鳥屋に賣ることを敢てするほどの残酷さもあるのであるまいかと考へられます。世の中に宗教家とか詩人とかいはれる人たちは、S君のやうな純な心ばかりの持主であつて、政治家とか事業家とかいはれる人たちは、その最も恂情な人たちでも相當な残酷さをもつてをるのではなからうかと思ひます。でなくては決して事業が有利に運んでゆかないのではないかと思ひます。今日の社會の上においてS君のやうなデリケートな感じをもつてをる人たちは、決して大會社の重役にはなれないだらうと考へざるを得ませぬ。それを運んでゆく人自身はデリケートな感じを

もつてゐるにしても、事業そのものが利益を目的とする以上は、必然的に使用人の膏血を絞るといふやうなあんばいにならざるを得ないのでせうか。同じく事業家のうちにも、單な利益のみであつて、その使用人に對して一滴の涙をもたない人もあらうが、また、温情掬すべき人もないではあるまい。かうした温情のある人でも、どれだけ使用人に對して、その温情を現はすことが出来るであらうか。温情があるにしても、その温情を他の冷酷さによつて抑制するやうでなくては、營利事業の効果を擧げてゆくことが出来ないのではないであらうか。

三。

釋尊は、一切大衆を慈愛した人であることは誰も疑問をさしはさん

ではゐない。この釋尊は、何故王位に即いて政治をもつて大衆を導か
れなかつたのだらうか、釋尊は、何故王位を棄てて孤獨の生活をせら
れたのだらうか。ここに私たちの考ふべきところがあるやうに思はれ
ます。天下の總追放使となつた源頼朝が慈悲心が深かつたであらうか、
我が骨を加茂川の水に流してくれというて寂しい死を遂げた親鸞聖人
が慈悲心が深かつたであらうか。一見、瞭然たるやうに考へられてを
ることであつて、しかも、一應考へる必要がないとはいはれぬのであ
ります。

人の性格には種々相違があります。ですから、宗教家や詩人が必ず
しもすべて純であつて、政治家や實業家が不純であると断定するわけ
にはゆかぬかも知れない、しかし、純な心をもつてゐる人が、その純

なだけでは、決して政治や營利事業が運ばれるものではなからうかと
思はれます。

四。

人間が生活するには何らかの形において團體を作らずには行けな
い、所謂社會なるものを作らずにはゐられないのが人間の一つの特性
らしい。既に團體を作るとするならば、團體をまとめる人間を要する
わけである。或事業を起すとすれば、それが一人で運べるものでなけ
れば、たぐさんの人が集つてせなければならぬ。たぐさんの人が集つ
て一つの仕事を運んで行くとするれば、どうしても、或場合には、その
團體は、各個人の自由を抑制するやうでなくてはならぬ。また、或場

合には、團體を組織する各個人は、人情をすて命をすてることかなくてはならぬ。さうしなくては、團體の進展はむづかしいことになる。團體を組織する各個人は、あまりたやすく自分の自由を抛ち、人情や生命を輕んずるやうだと、決してその團體は強固に維持されては行かない。だからして、團體のためにも各個人が相當に自分の自由を主張し人情を大切にし生命を重んずるといふことが大切になつて來る。ここにおいて所謂個人對社會の關係における容易に解決すべからざる問題が殘されることを見ます。個人をすてては社會は立たない、だからというて、單な個人をばかり重んじては社會は立たない。ここにむづかしい問題が惹起するわけであります。

社會を組織する個人が各個に自分のうちにその社會をもつてをるな

らば、彼自身の内容としての社會のために、彼の個人的利益を顧みないことが、そのまま彼個人の自由を尊重し、個人を超えたもつと大きな命を尊重することになつて來ます。たとへば、國民が國家の大事に當つて自分の自由をすて人情をすて命をすてて戦場の露となるといふ場合に、その人がもし自分の内容としての國家をもつてをるならば、決して個人を没却したことになる、却つてかうなることによつて奥深い個人が生きて行くことになります。ただ、かうした場合に、團體を組織する各個人がその個人のうちに團體を所有しなかつたならば、各個人は團體のために蹂躪せられるやうな感じをもつのであります。團體を運んで行く所謂主腦者なるものが各個人の團體的意識の表現である場合には、彼の命令はそのまま各個人の生命の叫びであるの

だから、彼の命令に従ふことは、個人自身が自己の生命に生きることになるのであります。ところが、主腦者が一個の我見をもち、その社會の外に立つて、或はその社會を組織する個人を離れた單な概念的な社會をもつて、その社會を組織する個人を支配して、そして、その個人の自由と生命とを輕視するといふことは、或場合には個人は權力をもつて強ひられる屈從の外には衷心から從順であることは望まれないのであります。

五。

かやうに考へて來て、私は、再びS君の養鶏の實感を思ひ出します。養鶏の場合には、鶏自身が無自覺であるかのやうであるから、いかに

も養鶏者が冷酷なやうになります。しかし、鶏自身が彼の種屬といふ團體意識をもつてをるならば、彼等自身の自由を抑制することが彼等自身の蕃殖に貢献することになる場合があります。しかし、人間が彼等の内心を自己の内容とせずして、單に彼等を蕃殖せしめて、自己の利益を圖らうとする場合には、どうしたつて残酷性を發揮せずにはをられないやうになります。今日のやうな團體的自覺性をもたない勞働者を集めて、勞働者の自覺しない營利事業を運んで行く人の心持においてS君の感じたやうな養鶏者の心持が果してないであらうか。私がかかる問題を社會の組織の上に考へようとしてをるのではない、ただ、私自身の日常の生活の上に知らず識らず自己にあらざる個人の自由を蹂躪して自己の私腹を肥やさうとすることをやりつつそれに氣づかな

いでをる無反省を反省したいと思ふのであります。私たちは、どこまでも深い内省によつて自己の自由を愛するやうに他人の自由を愛し、自己の情を重んずるやうに他人の情をも重んじ、自己の命を重んずるやうに他人の命をも重んずるやうにありたいと思ふのであります。

附記。こんなに養鶏の心理を考へて來ますと、みんなが養鶏しなくなるだらう。さうすると農家の副業がなくなるといふ心配があるかも知れぬ。ほんたうの心持から養鶏をやめる人があつたつて差支はなからう。また、養鶏をなす人の心持の上に、もう一つこれらの感想を超えた或確信があつてやることなら、それもまたよいことだと思ひます。この文を草し了つてから、ちよつと感じたままを附記しておきます。(大正一五・六・九)

三三二。清

閑

一。

近代の文明が産出した重なるものを數へてみると、汽車・汽船・自動車・飛行機などの交通機關を始めとし、紡績機械・機械織機・印刷機械などもその重なるものとして數へられるのである。これらの諸機械は、人生に多くの便利を與へてをることは、便利を思つてやまない人間がそれを喜んでをることそれ自身によつて證明せられるところである。汽車・汽船・自動車・飛行機・電車、これらによつて人間の活動が敏捷にせらるるの便がある、一生涯のうちに數回も世界を巡ることの出来る便宜が

ある。これがあるによつて世界が狭めらるる感じがするくらゐである。しかし、その一面を考へると、無暗に人間の心を騒々しくし、攪亂するではあるまいかとも思はるのである。これらの交通機關によつて、どんな田舎にをつても世界各国のめづらしいものに接することが出来る。近來盛になつたラヂオなどでは都會も田舎も殆ど同一のやうな感じがするくらゐに世界の距離が狭められることを感ずる。かうしたことによつて人類は多くの便利を得てをることは事實である。しかし、その反面において人間を輕薄にし内心の力が常に外物によつて擾亂せらるるの弊はないであらうか。こんな便利な交通機關のなかつた時代の方が却つて人生生活に今より以上の幸福があつたではあるまいか。私は、自分の郷里に始めて汽車のかかつたときに異常の喜びを感じた。

東京市に鐵道馬車が廢せられて電車の通ふやうになつたときも嬉しくて堪らなかつた。自分の郷里にかへつて停車場から自分の門前まで自動車の通ふのみたときも嬉しくてたまらなかつた。今日では、日本國中殆ど何處に行つても交通の便利がある。私のやうな一年の半分を旅行してをるものにとつては、便利は便利であるが、この便利のために人生がどれだけ乾燥無味に化せられてをるかも知れないと思ふ。

岩手縣二戸郡の淨法寺といふ村に私の始めて行つたのは、今から二十五年前であつた。ちやうどそのとき始めて福岡驛から淨法寺村まで五里の間に新道がつきかけてゐた。私は、人力車に乗つて行つたのだが、半分頃から歩かねばならなかつた。その後、數回この村に行つた、或時は徒歩で、或時は運送の馬車に乗つて行つた。いつも、この村の

誰かが福岡の驛まで迎へに出て下さつた。それから村近く一里ばかりの處へ行くと四五人の知己の方に子供たちまで交つて迎へに出てをられる、歸りにはまた多くの人たちがそこまで送つてくれる、そこから、さやうならというて別れる、勿論一人か二人はきつと驛まで同行して下さつた。ところが、本年は自動車を通ふやうになつてゐた。これまでは、六時間ばかりかからねば行けなかつたところを本年は五十分間で行くことが出来た、勿論驛まで迎へには出て下さつた。しかし、自動車が私の志す小田島家の門に止まるまで知合の人の顔を見ることは出来なかつた、歸るをりにもその家の前にてみんなとさつぱりした別れを告げるのであつた。何か情味がこれまでのやうに感じられなくなつたやうである。その村にをる間の感じも自動車の通はぬ時分

はよほど落ちついてゐたやうである。鹿兒島縣の志布志、熊本縣の多良木などは、汽車のない間から私は行つたのであつた、一日がけで十里に近い山道を馬車にゆられて行つたをりの方が汽車で行くことの出来る今日よりも情味の深さを感じる。今日の文明の利器はあまり便利すぎて、しつとりした情味に缺けるところがあるではあるまいか。私たちが始めて京都に留學した頃は、まだ北陸線が開かれてゐなかつたので、京都に行くといふので二十人ばかりの人が二里ばかりの郡境まで送つてくれ、その橋の上で泣き別れをしたものであつた。今日汽車が通じてからは、かうした情味深い旅行を味ふことが出来ないのである。なるほど、交通機關が便利になると短時間でたくさん人の處へ行かれる、一年中で日本國中約三十縣を講演して廻るといふやうなこと

は、昔の人には思ひもよらぬことである。私が東北地方を廻つたのは十回に近いことでもあらう、九州地方を巡廻したのも十回あまりになる、しかし、昔の人が一生に一度ゆつくり歩いたほど土地の親しみが感じられないのではあるまいかと思ふ。昔の人の傳記には、一生に一度足跡の印したところは特筆して書かれたのであるが、今日になるとあまり便利すぎて、さうした落ちついた気分が味はれなくなつて來た。琉球へ三べん行つた。勿論汽船であるが、それでも汽車で來られるところでないといふのと、海上の都合でをりをり船が遅れるなどするので、琉球の人には特別な温かい心持をもつことが出来るやうである。織物の方面で考へても、今日は安價な品物を手に入れることが出来るといふ便宜があるかも知れない、しかし、今日の機械發明によ

つて、たしかに手工時代よりも品物は悪くなつてをる、大量生産はそれだけ粗製濫造になる弊がある。印刷機械の發明によつて、たくさんの書物が出版せられる、古書の印刻、新書の發刊、便利は便利である、しかし、それによつて人間の智能はどれだけ多く啓發せられるだらうか。釋迦や孔子やソクラテスの生れた時代と今日の時代と、参考書を手に入れるといふ點においては殆ど比較にならない、しかし、今日のやうに多くの参考書が容易に手に入るからというて釋迦や孔子やソクラテス以上の人が出るとは思はれない。佛教の部門の中でも、今日では、梵語・西藏語・巴利語・支那語・何れの参考書でも自由に手にすることが出来る、しかし、参考書の自由にならなかつた時代に輩出した弘法・傳教・法然・親鸞・日蓮・道元などいふやうな優れた人が現代に出て

をるのであらうか。親鸞や道元は西藏本や巴利語の佛典は知られなかつたけれど、今日多くの参考書を有する人たちよりもより以上佛教に精通してゐられたではあるまいか。機織機械が發明せられて反物が粗製濫造になつたやうに、印刷機械が發明せられて學問も粗製濫造になつた點があるまいか。交通機關が便利になつたために情味に厚い交際がだんだん出来なくなつて行くやうに、印刷機械が發明せられて出版が自由になるために、却つて深邃な學問が出来なくなつて行くのではあるまいか。十九世紀の文明即ち電力と蒸氣力によつて發達した今日の機械的文明は、人生を騒々しくし、あわただしい外にとれたけ貢獻したことがあるだらうか。若い時代には、すべての物質文明に謳歌してゐた私は、近來、日増にその文明の利器なるものに對して嫌

惡の傾向を抱くやうになつてをる。これは、私が老いたせいであるかも知れないと考へてをる。身體と精神との疲勞がかくならしめてをるのかとも思つてをる。とにかく、私は、騒々しい、あわただしい生活よりも、しつとりした落ちつきのある生活を好くやうになつてをる、電車・汽車・自動車などが織るが如く通うてをる都會よりも、電車のきしみの聞えない自動車の塵埃の立たない田舎道の方が親しみ深いやうになつてをる。書物も活字本よりも木版本の方が趣きが深いやうな氣がする。法然上人の著作『選擇集』の如きは人を選んでその書寫を許されるくらゐであつた。今日のやうに何千部も印刷するといふ風ではなかつた、しかし、この間にどれだけ深く上人の思想が、少數の人の間とはいへ人間の心に印せられたことであらうか。今日はよく賣れると

なると三萬・五萬・十萬といふ本が賣れて行く、しかし、その感化力は昔のやうに二三の人が骨折つて傳寫する時代と優れてをるといふことが出来るだらうか。むしろ、昔のやうな印刷の不便であつた時代の方がより深く思想の傳播が出来たのではあるまいか。昔は自分の著作を出版するといふことは容易ならぬことであつた、だから、比較的容易である今日のやうな粗製濫造はなかつたやうである。今日は印刷が便利すぎてにはか作りの著作も尠くはないやうである、甚しきは、一時の賣名のために雑駁な著作をする人さへ出来るやうになつて來たのである。印刷機械の發明によつて、今日の學者が利せられてをることは比較的容易に参考書を手に入れることの出来るやうになつたことである、しかし、これによつて學問の發展が出来たとは斷定しがたい。カ

ントの時代からみると今日ではカントの讀むことの出来なかつた参考書を手に入れることが出来る、しかし、それがために今日カント以上の哲學者が出るとは斷言しがたい。

私は、四五年この方視力が減退したので、新聞が讀めなくなつた。雑誌でも新聞でも書物でもみんな讀んで貰はなくにはならない。従つて、従來ほど多くのものに眼を通すことが出来なくなつた。しかし、書物は充分に選擇して讀むやうになつたので、従來よりも善い書物を多く讀むやうになつた。その代り新聞や雑誌はよほど重要なものでなければ讀んで貰はない、それがために、私の頭は、従來のやうな騒々しさから脱してゆつくりした境地を得てをるやうである。これまで毎朝五六通りの新聞に眼を通したものであつた。今日では二三種の大き

な標題のみに眼を通すのが精々である。そればかりのためでもあるまいが、私の心はあまり騒々しくなくなつてをります。従つて、書物を讀んでも、また、自分で物を考へても、若い時分とは騒々しくなくなつてをります。あせらず、急がず、早くその結果を得ようとせず、悠悠とした豊かな氣分を味ふやうになつてをる。

二。

昔の人が「英雄の心中閑日月あり。」というたり、「人生の遊樂は清閑にあり。」というた言葉に面白い味のあることを近來になつて味はしめられてをる。俳人はよく閑寂とか閑雅といふ趣味を語つてをる。この頃、私は、新潟・秋田・青森・岩手の四縣を旅して到る處で閑古鳥の聲を

聞いた、幽邃な森の中で閑古鳥が固い判木でもたたたくやうな聲を出すのを聞いてをると、如何にも閑寂な氣分を味はしめらるる。

うき我を淋しがらせよ閑古鳥

といふ古人の句が思ひ出された。その淋しさは寂光の味ひである。清閑には佛教の涅槃の氣分が現はれてをる。あまり、事が多く、所謂人生多事といふよりも、悠悠閑日月ありといふ方が趣があるやうである。近來は、「この頃はお閑ですか。」といふことは失禮になり、人があつて、「この頃はお閑ですか。」といふと、あまりいい氣になれないことがある。同時に、「この頃はおせはしいこととせう。」といふことが敬語のやうになつてをる。「お閑なときに来て下さい。」といふ言葉には輕蔑の意が現はれ、「おせはしかるけれど、どうぞお出下さい。」といふ言葉に

は敬意が含まれてをるやうになつてをる。近代人は、閑がないといふことを誇とする風がある、そのくせまた一面には「どうも閑がなくて困る。」といふ歎聲も發せられるのである。近代になつてやかましく論じられる労働時間短縮の問題などは、閑がほしいといふ叫びのやうである。人からお閑ですかといはれると面白くないのであるが、閑がないで困るといふ歎聲も心から發せられるのである。

閑なといふことは、人に相手にせられず、世の中に認められないといふことの反面にもなる。誰からも用事をいひつけてくれない、誰からも仕事を命じてくれない、誰からも交際を求めてくれないときに、一種の悲哀を感じるのである。かうしたときの閑は閑暇の意味である。手持無沙汰な感じでもある。「この頃はお閑ですか。」といふことは政治

家や學者に對しては、一向天下に顧みられないかといふことであり、商人に對してお閑ですかといふことは、あなたの店も世間に相手にせられないですかといふことになるわけであるから、聞くものにとつては氣持のようないのも無理のないことである。だからというて、この反對にあまり天下に用ひられすぎて自分自身の發起する生活の出来ないことも喜ぶべきことでもない。商人だとあまりはやりすぎて自分の遊樂の時間のないことがあまりつづくこと忙しくて困るといふ愚痴も出て來るのである。

どちらかといふと、近代人には忙しいことを好むといふ傾向はたしかにある、しかし、これは、内面的であるのだらうか、或は對他的であるのだらうか、考へて見る必要がある。全體、忙しいといふ言葉は、

自分の内心が他から擾亂せらるるといふ意味ではあるまいか。自分が外物のために引きずられ攪亂せられるときに忙しいといふ感じを受けるとではあるまいか。同じ仕事をするにも、常に自分の内から湧き出る仕事をするものにとつては忙しいといふ感じは或はないではなからうかと思ふ。そこには悠々たる閑日月があるのではあるまいか。自分で發起することでも、その活動力の強い人にとつては、あれからこれへと心の巡りは早いのである、しかし、その感じは忙しいといふ感じとは違ふと思ふ。

仕事に逐はるるといふことと、仕事を逐うて行くといふことがあると思ふ。仕事に逐はるるものは、いつも忙しい騒々しい感じをもつてをる。仕事を逐ふものは、忙しいといふよりも、むしろ、靜寂な氣分

をもつてをる。實際のやつて行くことをみると、私は近來になつて何をやつても能率があがつてをるやうである、しかし、若い時のやうな忙しいあわただしさを感じない、外面的にはどんなに忙しいことをやつてゐても、若い時のやうに騒々しい氣がしない、心の中が何となくゆつたりした氣分である。これは、若い時分には、これだけのことをせねばならぬといふやうな固くるしい考をもつてをつた、所謂功名心が強かつた、しかし、今日になると、やつても、やらぬでも、どちらでもよいのだといふ氣がしてをる。どんなことをやつてをつても、それをやらなくてもよいのだ、やるのは自分の物好であるのだといふやうな考もある、だから、どんな仕事をして、あまり強ひられたやうな氣がしてゐない、従つて心の騒々しさとあわただしさがないうやう

である。

三。

「有爲の人物」といふ言葉がある、それからまた「無爲にして化する。」といふことがある。有爲・無爲といふことは、佛教では相當にやかましくいはれることである。有爲の人物といふと、將來のある人とかいふやうな意味で一廉の仕事をする人といふことになる。無爲にして化すといふときには、無爲は細工のないことであつて、あまり仕事氣でなしに必然に人を徳化するといふことになるのである。だからして、ほんたうの意味における有爲の人物は無爲にして化する人物であるに違ひはない。何時も何か功名を成さう仕事をやつてみようとか考へてを

る人物はまだ有爲の人物でないのである。すべての仕事氣がはなれてその人の内から湧いて来る生活が悠々として實生活にしみ出るところに有爲の人物たる所以が現はるのである。佛教では有爲といふことを拵へ事または煩惱の替名としてをる、無爲といふことは拵へ事のない煩惱を離れた境地としてをる、さうして「有爲も空なり、無爲も空なり、畢竟空なり。」というてをる。仕事をしようとする心も空しい心であり、何もせぬでもよいと止まる心も空しい心であり、畢竟は空しいことであるといふのである。これはせねばならぬと片寄るのでもなし、せぬでもいいからとてぶらつとしてをるでもなし、仕事にあせくるでもなし、仕事をせぬことに腰を据ゑることでもなし、その二つを捨て去つたところに畢竟空の廣い世界があるといふ味ひである。こ

の空の境地が即ち清閑の境地である。この清閑の境地に在るものは或は却つて能率のあがる仕事をするかも知れない。

常に自發的である人は心中大に安らかなところがある、あせること、もがくこと、さわぐこと、これらはみな對他的な心から起る相である。かうした心で事をなさうとするときには、せぬ仕事に疲れるといふことになつて来る。でなければ少しした仕事に誇るといふことになつて来る。仕事に疲れること、仕事の結果に腰を据ゑることは、やはり、自發的の生活者でなくて對他的の生活者の相である。對他的の生活者がその生活氣分から無爲といふことを解釋すれば、無爲がまた有爲の一つとなつて来る、だから、有爲も空なりといふと同時に無爲も空なりといはねばならないのである。

四。

昔の人が

坐禪せば四條五條の橋の上行き來の人を深山木に見て

と詠じたことを思ひ出す。今日ならば、電車・自動車・オートバイ・飛行機の右往左往に走つてをる東京の眞中につても、靜かな心を味ふことは出来るといふ意味であるらしい。あのがたがたする輪轉機の音の中で靜かな思を練る學者もあるに違ひはない。かうした人たちには、決して今日の物質的文明は累を及ぼすものではないに違ひはない。かうした靜かな衷心の出來てをる人ならば交通の便利があつたとても自分の心を亂されることはあるまいし、参考書がたくさんあつたからと

て、それによつて自己を亂されるといふこともあるまいと思ふ。しかし、かうした人はあまり多くはあるものではなからうと思ふ。昔の人が人里遠き深山に修養の道場を設けたことも意味のないことではないのである、しかし、かうすることによつて、却つて心の弱い人間が出来る虞もある。さう考へて來ると、今日でも機械の音の囂々としてを内にあつて黒い煙筒の煙を吸ひつつ、しかもそこに清閑な心をもつてをるのもよからう。これほど超越した人には決して文明のあらゆる利器はその累を及ぼすことは出来ない、しかし、ここまでのいたらない人にとつてはあまりに客觀の世界が目まぐるしいほど變つて行くので、これがために内心を攪亂されてそのしつかりした靜寂な心を失うて煩惱妄念の亂心に囚はれ、或は神經衰弱症になり或は便利から便利

へと馳せ廻る輕薄な利己主義者となり了るのもあるやうである。便利の世界に生きてをるものはどうしても輕薄になりやすい、さうして、ゆつたりした潤ひのなくなる弊害がたしかにある。今日の都會人よりも、文明の影響の少ない田舎人間の方が、一種の潤ひをもつてをる。私は、必ずしも今日の機械文明のすべてを破壊せねばならぬとは思はない、しかしながら、これによつて人間の衷心の清閑なところを亂されることのないやうにと念じてやまないのである。勞働時間を短縮するからゐでなしに、もつと深いところにおける閑寂を望んでやまないのである。毎日毎日忙しい忙しいといふ思に亂されないやうに如何にも落ちついた氣分で、人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬るといふ風に自分の道に靜かに精進するやうにありたいと念じてをる。昔の人が

よく清閑とか閑寂とかいふことを書いたその気分がこの頃になつて深く味はれるのである、一生汽車や船に乗つて天下を駆け廻ることのみが活動でない、壁に向つて九年も坐つてゐた達磨も、その坐つてゐたことに大きな活動の意味があるのである。今日の私たちはあまりに機械的な文明の便利にかきまはされてはゐないであらうか、酔はされてはゐないであらうか、それがために機械化して血の温みと涙の潤ひのないやうな殺風景な世界を拵へてをるのではなからうか、大に反省せねばならぬと思ふ。私は、清閑な落ちついた心で着々として自己の道に精進することを切に念じてをるのである。(大正一五・七・一九)

三四。法について

一。

この頃、私は、法といふことについて考へてをります。それで、本年の講習會に『無量壽經』の下巻の始を講じたのですが、その話の中心には、いつも、この法といふ心が味はれてをつたのであります。私の考を確かめるために、哲學辭書や佛敎辭書や漢字の辭書なども五六種調べてみました、しかし、その法といふ考について、私の今日思つてをるやうに書いてあるものがなかつたやうであります。廻り廻つて考へてゆけば、私の考に到達することは勿論であるが、古來の法につい

ての註釋はあまり明白になつてゐなかつたやうな氣がします。或はこ
れは私の明白でなかつたのであるかも知れませぬ。とにかく、私は、
この頃になつて法の概念が明かになつたやうに思ひます。

普通、人に法といふ文字の最も觸れるのは、法律の法であります、
それから、また、法則の法であります。法律の法と法則の法とは一つ
であるか二つであるかといふことも考へに入れることも出来よう。或學
者は、法律には權力が附隨してはをるが法則にはこれが附隨してゐな
いというてをる。國家の法律はその背後にこれを強制する權力といふ
ものがある、しかし、自然法とか道徳法とかいふやうなものには、こ
れを強制する權力がないと考へることは果して適當であらうか。道徳
法でも自然法でも、それが法といはるときには、強制的な權力をも

つてをるものである。勿論、自然法の強制の政府はない、道徳法を強
制する政府もない。政府や軍隊がないからとて強制力がないといふわ
けではない。自然法といひ、或は道徳法といふ以上は、形はなくても
それ自身に必然的な強制力がなくてはならぬのである。これに順ふも
のは賞せられ、それに逆ふものは罰せらるるといふことは、法律ばかり
でなく、自然法でも道徳法でもみんなさうである。法律が窃盜を禁じ
てをる、その場合、窃盜すれば罰せられる、その刑罰を遂行する國家
の權力といふものがある。では自然の法則はどうであらうか。たとへ
ば、ニウトンの引力法則といふものを法とすれば、萬有は必然的にこ
れに順うてをることになる。これに逆うては存在することが出来ない。
だから、引力説が自然法であるといふには、そこに必然的な普遍妥當

性がなくてはならない。道徳法といふこともさうである。たとへば、子は親を大切にするといふことが道徳法であるといふ以上は、親を大切にすると子はそれ自身に賞せられ、親を粗末にする子は自然に罰せられるといふ傾向をもたなくてはならぬ。世の中には作法とか或は禮法とかいふものもある。かういふことでも、やはりそれが法といはれるには、そこに或必然性を認めなくてはならぬ。そして、たとひ具體的の機關はないにしても、法それ自身の中には、これに逆ふものは罰せられ、これに順ふものは賞せられるといふ無形の強制的権力が潜んでをることは明かである。

法には、それ自身これを強制する権力が含まれてをる。だから、既に法といふ以上は、それは、誰でもこれに順はなくてはならないとい

ふ性質をもつてをる。そこで、この強制的権力を考へてみなければならぬ。普通の法律家は、法律の強制力は國家の権力、も一つ具體的にいへば、軍隊や警察の力で強制するのであると考へてをる。形の上ではそんなになつてみえる、しかし、警察力や軍隊力が決して法を強制する権力をもつものではない。國民の中心意識に法が存在するときのみ、その法の強制力があるのである。もし、國民の意識の中に法それ自身が存在しなかつたならば、國家の権力もそれを如何ともすることは出来ないのである。法律は法を内に藏するもののみ有効であつて、それを内に藏しないものには無効のものである。勿論、外的にこれを罰することは出来るけれど、しかし、それは人格の内容にまで及ぶことは出来ないであります。一つの法律が警察力や軍隊力で強

制せられるかの如く見ゆる場合は、その強制的權力である警察力や軍隊力が國民の意識内容にある場合にのみ限られてをるのである。だからして、いくら帝國議會が議決して、それは、決して法律にはならないのである。いくら、議會が多數で決した法律案でも、それが國民全體の意識の内容に存在しないことであるならば、決して、それは國家の法律となることは出来ないものである。だから、日本の憲法などでは、議會の議決した法律案はそのまま法律とは認めないことになつてをる。それを天皇が裁可せらるるときに、これが國家の法律となつて來るのである。では、その天皇とは誰であるか。天皇は、五尺の身體を代表する個人ではない、我が憲法における天皇は、萬世一系の天皇であつて、常に國民全體の憲法を自己の意志として存在したまふ國

民の代表的といふよりも、むしろ、國民全體の表現としての一人格でましますのである。帝國議會の議決した法律案が、この天皇の意志の裁可によつて始めて法律となるといふことは、それが國民全體の意識の内容になるといふことの承認となるのである。だから、日本の國民の中に、もし、この天皇の上に自己を見出すことの出来ないものがあるならば、その人に對しては、日本の法律は無効である、そして、何等の強制力をもつてゐない。だから、日本の法律條文は如何程あつても、日本の天皇を自己の内心に所有しない人間には、日本の法律は存在しないといつてもよいのである。勿論、形式の上では多數者を代表する法律は、外的としてそれに刑罰を與へようとすることはある。日本の土地に住んでをつて普通に法律とせられてをるものを自己の内心

に所有しないものは、いはば日本の國民ではないのである。だからして、日本の法律は外的にこの人を國外追放もすることも出来ようし、或は死刑に處することも出来よう。しかし、決して内的にこの人を強制する力をもつてゐない。今日の法律觀念では、如何に内心に天皇を否定してをる人でも、外的に日本に國籍を有する以上は國外追放をすることは出来ない。その代りに國家は彼等に死刑を命ずるのである。天皇に對する犯罪者は死刑に處せられるのは、或意味における國外追放である。そして、それは、決して不合理ではないのである。しかし、また、かかるものをも自己の心内に容れて訓練するのが、ほんたうの意味における大君にまします。だから、大君の心のうちには、法として常に攝取があるわけである。だから、萬止むを得ずして、天皇を否

定するものに對して死刑を命ぜざるを得ざる場合があるにしても、自分の指を一本截り割くやうな痛みを感じ給ふのであります。かやうに考へて來るときに法の觀念の中には必然的普遍的妥當性があることは明かになつて來る。自然法でも道德法でも作法でも、禮法でも、もつと卑近な所に行つて料理法や按摩法といふやうなものにいたるまで、それが法といはるる以上は、そこに必然的普遍的妥當性をもつてをらねばならないものである。

二。

かやうに考へて來ると、法といふ觀念にはそれ自身の存在權をもつてをることになります。『成唯識論』の中には法の觀念を「自性を任持

して物解を生ず。」と書いてある。この自性を任持するといふことに、法それ自身の必然的普遍的妥當性があるといふことを現はしてをるのであります。國家の法律は國民の自性を任持するものでなくてはならない、自然法は自然の自性を任持するものでなくてはならない、道徳法は道徳の自性を任持するものでなくてはならない。物解を生ずといふのは、この自性を任持する物それ自身が人間の意識の上に認識せられることをいうたものである。だから、自性を任持して物解を生ずといふことは、法についての二つの解釋ではなくて一つの解釋であることを思はぬばならぬ。専門的の言葉をもつていへば、法に對する二義ではなくて一義なのであります。そこで、自性を任持して物解を生ずとは、物それ自身の性質が人間の主観の上に現はれて來るときに、そ

れを法と名づくるのであります。國法といふものは、國民それ自身の性質が國民の意識の上に現はれて來るものである。ですから、國法は國民の主観である、そして、その主観は單なる遊離的な主観ではなくて、國民自身の自性をその土臺としてもつてをるところの主観でなくてはならない。語を換へれば、その根柢に客觀的な根據をもつてをる主観でなくてはならない。法は國民ではない、國民それ自身の性質が國民の意識に認識せられるときに、それが法といはるのである。だから、法律は國民の性質それ自身の國民主観の上に現はれたものであるといふことが出来る。國民主観の上に現はれるといふことは、國民の主観が國民の性質それ自身の内に流れてをるといふことになつて來ます。それは、國民自身の性質といはば空間的な物象である、それが